カルデアに来たサプラァァァァァァァァイズ！！

レルン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は［サ゛ヨ゛コ゛オ゛オ゛オ゛オ゛!!!!］みたいな感じで行けたらなと

あとこれはとある動画を見て思い付いた物です、カオスです

ノルマは［だしてぇぇぇぇぇぇぇ!!!!］です

（最近ノルマは達成できず）

そして最近は第二章入りました！

参戦タグ⇩

タカギラス

ＫＯＦ
ｖａｍｐｉｒｅ
インフィニット・ストラトス
オーバーロード
ダークソウル
ＮＡＲＵＴＯ
僕のヒーローアカデミア
八話救い無し。観覧注意
ナンバカ
駄文
※後に増える予定の者　あのカマキリゴジラ解説様ｅｔｃ・・・

目次

序章　仮面ライダー編
さあ！カルデアダァァァァァァァァァァァァ ―――― 1
何?! 貴様は・・・ アカレンジャー?! ―――― 4
[や、違う!!] ―――― 7
俺は、仮面ライダーアァァァァァァァァァァァァイダ!!! ―――― 10
さあ、ショウタイムだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁガッチャ☆（Rかも?） ―――― 13
[グダグダ本能寺編] ごだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!! ―――― 16
[グダグダ本能寺編] シリアスだっけ？ ―――― 20
[グダグダ本能寺編] 矛盾だらけのベストマァッチィ!!フハハハハハ!!! ―――― 31
ヒーロー対戦開幕！
ウルトラマン―1 ―――― 39
新たな特異点　騎士と魔方 ―――― 45
未来に還る月光蝶 ―――― 50
第一章　藤丸立香と言うＩＦ
第二話 ―――― 56
第三話　ＧＯＬＤＥＮ ―――― 69
第四話　募る者、始まり ―――― 81
第五話　始まり、ＺＷＦ開幕 ―――― 88

第六話　砂浜の都市で ―――― 94
第七話　加速する世界 ―――― 102
第八話　世界が終わる。（観覧注意） 108
第二章なんちゃって予告 ―――― 115
第二章　仲間集め
第一話　南波刑務所とペルソナ 121
第二話　美少女あらわる。木工製品と核 ―――― 131
エピローグ？　裏の裏、そして裏。 139

序章　仮面ライダー編

さあ!カルデアダァァァァァアアアアアアア

俺はある日変な力を手に入れた、[ザヨ゛ゴオ゛オ゛オ゛!!]うるせぇえ!!

[感動的だな、だが無意味だ]あぁそうかい、……　タカトラニイサン!![オ゛ン゛ドゥル!!]

ウ゛ラ゛キ゛ッ゛タ゛ン゛テ゛ス゛カ゛!!

と、いう風にカオスな状態であり、さらに怪人や仮面ライダーになれる能力、正直デメリットが大きい[私を無視するな!!私は…　神だぁあああ!!!][五月蝿い!!][あ～あ、起こられちゃった]

ん?何だこれ?カルデアに一日三食給料付き?……　[コイツはラッキー!!]五月蝿い

さて、行ってみるか[バトルホッパー!!]あんがと[ブラックサン!!][信彦ぉお!!]

「行くぞ!!」

《ブルゥゥウンン!!（わかったぜ兄貴!!）》

「おう!!」

所長「と、言うわけでして――――――」
あー、話長ぇ、と言うか俺は作業員だ!!［ミツザネェエ!!］［(。Д。) ダイジョウブカ―?!］
へ、笑えるぜ［今、俺を笑ったか?］違います
早く終わらんから一人寝たじゃん……　あ、つまみ出せ?あ、ハイ

「あ、Ｄｒ．ロマン……　ここ空きじゃないですよ元から」
Ｄｒ．ロマン「え?!ここ自分のお気に入りのサボり場だったのに…」
「あ、それチクリマショウカ?」
Ｄｒ．ロマン「そんな黒い顔で言おうとしないで!!!と言うかその女の子は…　?」
「寝てたからつまみで」
つまみ?「ちょっと―、作業員さんそんなこと言わないでくださーい……」
Ｄｒ．ロマン「で、君の名前は?」
立香「藤丸立香ですぅ……　あと首根っこ話してくださーい……」
「嫌だね!!!」

すると大爆発!!立香ちゃんは俺の手を振りほどきルームへ?!

ちょっまてー?!

Dr．ロマン「ちょっと?!何処行くの?!」

すまん、なんかルームに入ったらしまった

しかも閉じた、なにがって?扉だよ!!!「だしてぇぇぇぇえええええ!!!(ノルマ達成)」

うるせぇ!!!と言うかマシュさんと手を繋いで百合になっている……だと?

と言うか周りが青く?!「だしてぇぇぇぇええええええ!!!(ノルマ達成2回目)」

「カブトォオオオ!!!」「我はZEXTと共にありぃぃぃいいいいいい!!!」うるせぇ!!

あぁ、何でこんな事に……「(。Д。)ダイジョウブカ—?!」大丈夫じゃねぇぇ!!

何?!貴様は・・・アカレンジャー―?!「や、違う!!」

なんということでしょう・・・・・目を覚ませば「ザヨ゛ゴォ゛ォ゛ォ゛!!」「だしてぇぇぇえええええ!!!!(ノルマ達成)」「ミツザネエエ!!」うるせぇぇ!!!静かにしろ!「あ~あ、怒られちゃった」
「と言うかここどこだ?・・・・・・・さて、ジレンマでどうにかなるか?」
「今、俺を笑ったか?」いや、「なるほど、大体解った」なにがだ?は、そうか!!立香ちゃんを連れ戻すのが俺の・・・・使命?「一人、引き返した」「いったい何処に?」「黙ってろよ、クズ」「ミッチ!!」五月蝿い!!!

――――――――――――――移動中(バトルホッパー!!)―
立香「あ!作業員さん!!」
「久しぶりだな!」
「俺の名は南光太郎、仮面ライダーだ!!」五月蝿い!!「シャドームーン!!」「信彦!!」「メッチャラッキー!!」「や、違う!!」「私は神だぁあああ!!」「五月蝿い!静かにしてください」「GAEM OVER」

何だこのカオス.....［誰だ貴様!!］へ?あ、マシュちゃん!!??そんな淫乱に!

マシュ「.....　タタキワリマスヨ?サギョウイインサン」

「すまない、だがその後ろの赤い奴は.....　アカレンジャー?!」（タイトル回収）

エミヤ「違う!誰がアカレンジャーだ!、私はクラスアーチャー真名エミヤだ、作業員?」

「お、おう真名と言うのはよく分からんが宜しく」

所長「ちょっと!!あんた!!」

「へ?!所長、何故此処に?!」

所長「それは私の台詞よ!!一般人の他に使えない作業員が来るなんて!!!!」

「ん?所長、マシュちゃんの肩に居るのは?」

所長「ちょっと?!話を聞きなさい!!作業員!!??」

［誰だお前は!］［宇宙刑事...　アオレンジャー!］［違う違う!］［秘密戦隊ゴレンジャーだよね?］［ブブーはずれ～、正解は!］［鉄十字団に恨みを持つ男!!］［タンクローリーだッ!］何が何だか解んねえよ!!と言うか居るはずのない奴居なかった?!え、いつの間にか増えるの?!!この能力どうなってんの?!!!!

フォウ「フォウ!!フォフォウフォー!!」

「なるほど、フォウか!!」

マシュ「もう!!いい加減にしてください!!!」
すまない、これは俺の生き様なんだ・・・・・［ミツザネェエ!!］［黙ってろよ、クズ］
閉まらねぇな・・・・・・ はぁ、と言うか何で一人増えてんだ？エミヤって言う奴
確か俺が見るにはあの場所には居なかったような気が・・・・・・・ ま、良いか!!

俺は、仮面ライダーアァァァァァァァアイダ!!!

所長「そう言えばあなた、特技で変身するって有ったわよね？」
立香「え?!変身?!やってー!!」
「はぁ・・・・ ―わかったぜ!!」
そう言って俺は変身する!! [何だって?!] 俺が変身したのは?! [仮面ライダーだ!!]
[や、違う!!] [何を言っているんだお前は？] [仮面ライダーVスリィィィアアア!!!]
[正解は！] [仮面ライダーだ!!]
「仮面ライダー!!ブラッ!!アーエックス!!!」
そう!!仮面ライダーブラックアーッエックスだ!!そう!!!一人で三人の [仮面ライダーだ!!] うるさぁぁぁぁぁぁ!!!い！ [あ～あ、怒られちゃった] [(＾Ｕ＾) 言い台詞だな、感動的だな、だが無意味だ] [誰だ♪] [仮面ライダーだ!!]
エミヤ「仮面ライダーか・・・・・・ 懐かしいな、子供の頃を思い出す」
「そう言えば何故俺達は居るんだ？」
所長「それは・・・・・・」
「そうか!!ゴルゴムの仕業か!!」

［ゾ　ク　ゾ　ク　す　る　う　（。∀。）］［私もイっちゃおうかしら♡］［全て乾巧ってやつのせいなんだ］何だって?!［や、違う!!］［だしてぇぇぇぇぇぇぇ!!!（ノルマ無理矢理達成）］何じゃあこりゃあ?!
「行くぞ!!仕業の現況へ!!!」
マシュ「え、ちょっ?!何ですかこの光?!アーッ♀!!!」

マシュがエ○い声を出すといつの間にか黒い騎士、多分聖剣持ってるので何とか王!!
なるほど!!奴がゴルゴムか!!!
「行くぞ!!!リボルケイン!!!」
何とか王?「私は……　ペンドラゴン……　だ……」
立香「よし!!帰るか!!」
［不思議時空!発生!!］

［カット!!］

Ｄｒ．ロマン「いやー、お帰りー……　て、所長?!死んだはずじゃ?!」
「不思議なことが起ったんだ!!（変身解除）」

所長「え‥‥‥ なんか私の死体が冷凍保存されてる（。Д。）」
マシュ「先輩‥‥‥ ヤ　ラ　ナ　イ　カ　♀」
立香「え、何処に連れてくの?!――――――アッーーー♀?!」
フォウ「フォーウ‥‥‥‥」
「すまない、俺には何も出来ん!!!」
Ｄｒ．ロマン「あ、聖杯は?」
「ん?あぁ、これか?」
Ｄｒ．ロマン「お?!これこれ!!!有難う!!次のレイシフトまで休んでてね!」
「おう（レイシフトが解らない人）」

さあ、ショウタイムだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁガッチャ☆（Ｒかも？）

「さあ、ガッチャだ!!!」
ハハ!!!イケイ!!!［ラッキー!!!］［ハハハハハハ!!!ハーっハハハハハ!!!］［うるさぁぁぁぁぁぁぁぁい!!!俺は死んだんだぁぁぁぁぁぁぁ!!!］［五月蝿い!!静かにしてください、集中出来ません］［あ～あ、怒られちゃった］［ナニイッデンダフジャケルナ、］［ダディバナザン?!ナンデミデルンデズ?!］［アアァァァァァァァァァァァァ?!］［ザヨ、ゴォ、ォ、!!］［ブウゥゥン!!］［ゾ　ク　ゾ　ク　す　る　う!!］うるせぇえ!!
立香「おうよ!!爆死覚悟の五十連だ!!」
マシュ「え、大丈夫なんですか?!爆死覚悟は止めた方が……」
「何を言っているんだ!!爆死覚悟のガッチャが良いんだろう!!」
マシュ「ナニイッデンダ?!」
立香「ホイ☆!!」
マシュ「アアーー!?」

おう、光が三本・・・・［ゴレンジャーよね?］［違ぁう!!］［仮面ライダーだ!!］［サプゥウウラァァァアアイズドラァァアアアイ］［お前、何やったかわかっとんのか?マキシマムドライブ解ってんのかぁぁぁあ?!］［・・・・・・・］［カツ丼食えよ・・・・　カツ丼食えよぉぉぉおおおお!!!!］［ナニイッデンダフジャケルナ゛!!］毎度毎度うるせぇ!!

ＢＢ「ハァーイ!私ですよ!!ＢＢちゃんですよ!!喜んで!!一二三はい!!」

「・・・・・　あれ?普通にＢＢくるかね?」

立香「ヒャッハァァアアア!!!」

マシュ「先ぱぁぁぁあああああい?!」

「不　思　議　時　空　発　生　!!」

ＢＢ「あ、ちょっ?!何ですかこの光り?!ダシテェェェエエエエエエ（ノルマ達成）」

「何なら大人しくしてろや!!」

ＢＢ「・・・・・　ハイィ・・・・　あ、光が消えました!」

立香「食堂ＧＯ!!!ＢＢもこいや!!」

ＢＢ「首根っこはラメェェエエ♡」

マシュ「アァァァァン♡首根っこはダメェエ♡」

「なるほど、これは俺のせい・・・・・　なのか?」

エミヤ「作業員、早くつまみ出せ」
「すまない、俺には出来ん」
エミヤ「……　私にも無理だ」
立香「おぉぉおおお持ち帰りいいいいいいいい♡」
ＢＢ「せぇぇぇんパァァアアイイイ♡ハァァアアアアアン♡」
マシュ「アアァァァン♡」
エミヤ「……　はぁ……」
「閉じ込めるか？」
［ナニイッデンダフジャケルナ、!!］［ゾ　ク　ゾ　ク　す　る　う　!!］［さあ、お前の罪を数えろ］［今更数えきれるか!!］［その命、神に返しなさい］［Ｏｋ!!ｓｔａｒｔＹＯＵＲＥＮＧＩＮＥ］［ダシテェェェエエエエ!!!］［ザヨ゛ゴォ゛オ゛!!!］［ブウゥウン!!］［絶版☆］［私の方が○パイ大きいわ!!］［や、違う!!］［仮面ライダーだ!!］［ナニイッデンダフジャケルナ、!!］だからうるせぇえ!!

［グダグダ本能寺編］ごだあああああああぁぁぁぁぁ!!!

Ｄｒ．ロマン「新しい特異点が見つかった」

「‥‥　食道で男三人＋αで集まるか普通？」

Ｄｒ．ロマン「良いじゃないか！ほら、食べながら聞けるから一石二鳥じゃん!!」

エミヤ「あー、その前に質問良いかね？」

Ｄｒ．ロマン「ん？何かな？あ、スリーサイズは止めてね？」

［私の方が○パイが大きいわ!!］［ゾクゾクするう!!］［あぁぁぁぁもう五月蝿い!!］［黙ってろよ］［ミッチー?!］［なるほど、大体解った］だから静かにしてろ!!

エミヤ「馬鹿を言うな‥‥　その隣にいるサーヴァントは一体だれだ？」

???「え？儂のスリーサイズ？Ｈ!!!」

「多分服装の中に病的に織田信長だろ？」

信長「何?!何故気付いた!!まさか御主‥‥　怪しげなエスパー？」

「違ぁう!!俺は作業員だ!!」

［仮面ライダーだ!!］［俺の名は本郷猛］［レオ兄さぁぁぁぁん!!］［ザヨ〟ゴオ〟オ

〟!!!]［バッチリミロー］［オレ！］［仮面ライダー……　3号］［仮面ライダーＢＬＡＣＫ!!!］［ＲＸじゃない?!］［本郷サァァァアアアン］［ごだあああああぁぁぁぁぁ!!!!］［ダシテェェェェェェェ！（ノルマ達成）］だから五月蝿い!!!

「と言うか何故織田信長が居るんだ?と言うか地面に寝そべる信長にそっくりな生物は何?まさか〝ノッブ〟だとか変な名前じゃあないよな?」

信長「だから何故解る?……　まさか!!ゴルゴムか?!」

「ナニイッデンダフジャケルナ〟!!俺は人間だ!!そしてゴルゴムじゃねぇえ!!と言うか何でゴルゴム知ってんの?!何?織田信長ってメタ的存在なん?!」

エミヤ「落ち着け!!馬鹿共!!」

ぐっは……　ゲンコツは手厳しいぜ…　フッ……　［今、俺を笑ったか?］［兄貴……　！］呼んでないので地獄兄弟はお帰り下さい［無敵将軍見参!!］［ダイナマン!!］［ジャーッカー♪］スパー戦隊は残ってください［メッチャラッキー!!］［俺、参上……］ネガはお帰り下さい

Ｄｒ．「次の特異点は……」

「ゴク……」

エミヤ「……　いったい何だ?」

Ｄｒ．ロマン「それは――」

信長「――――亜種特異点!!グダグダ本能寺じゃ!!」
Ｄｒ．ロマン「ボクの台詞?!」
「亜種特異点?･何じゃそりゃ････　エミヤ解る?･」
エミヤ「はぁ、よく考えれば解るだろう?･君でも」
「何かディスられた気が････」
Ｄｒ．ロマン「と、言うわけで――――――」
信長「――ルームに向かうぞ!!」
Ｄｒ．ロマン「だからボクの台詞うううううう!!!!」

［グダグダ本能寺編］シリアスだっけ？

―レイシフト先　???―

「さて……　これ如何する？」

信長「知るか……　と言うか何で儂ら囲まれとんの?!」

そう!!レイシフトすると敵陣のど真ん中に居て今に至るのだ!!［火星で発見された――］オープニング始めんな!!気まずく何だろうが!!［ザヨ゛ゴォ゛ォ゛!!］［ダディバナザン?!］［おいミッチー!!］［黙ってろよ］［ナニイッデンダフジャケルナ゛!!］だから少しシリアスになれって!!［このーままー♪］まだそこかよ!!オープニング……

よし!!じゃあ実験を始めよう

［ラビット!!　タンク!!　ベストマッチ!!］

［Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？］

［鋼のムーンサルト!!　ラビット!!タンク!!　イェーイ!!］

「勝利の方程式は決まった!!」

信長「何それ格好いい!!何かベルトよこせ!!」

「お、おう……　じゃあこれな？」

手渡したのは信長アイコンとゴーストドライバー・・・・・　何をやるかわかるね?［成る程・　大体解った］［仮面ライダーだ!!］［ブラックサン!!］［絶版☆］違ぁう!!ブラックサンじゃねぇえ!!［仮面ライダーだ!!］二回目だよ!!［あ～あ、怒られちゃった］

信長「えー、と・・・・　こうかの?」

［信長!我の生き様　桶狭間!!］

信長「おお?!馴染む!実に馴染むぞ!!」

―カット―

［信長!オメガドライブ!!］

［ボルテックフィニッシュ!」

「・・・・　まだ変身は解くなよ。まだ何か来る!」

信長「なるほど、御主がそこまで言う強者が来るのか?なんかずっと聞こえてた声が聞こえなくなったし。それにギャグに走っておらぬしな。」

え?あれ聞こえてたの?・・・・　まあ、あれが今聞こえないのは幸いだ。

そう話していると白いローブの何かが，次元，を突き破り出現する。

そしてその後ろには東映歴代のヒーローが黒いモヤを出しながら立っている。

???「ほう、俺が来るのを待ち望んでいたか。だが、それも然り!!」
信長「ん？御主のような者は出て来ないはずなんじゃが‥‥　はて？」
「そんぐらい気付け。あいつが姿を出したんだろ？そもそも忍び自体が可笑しいんだよ、しかも俺達は二人だ、さらに周りには敵が居た。これでわかんだろ？‥‥　彼奴が元凶だ」
信長「あれ？こんなシリアスだっけ？あぁ、テコ入れが入ったんじゃな」
シネマ「俺の名は，シネマ・エボルト，。さあ、貴様等は如何する？まあ、俺は貴様を手に入れたいだけだ。その能力、才能!!世界が拒みきれず出現した存在!!興味深いな!」
「で？あと、後ろの人達は関係あんのか？‥‥　まさかあの声って。」
シネマ「あぁ、あれか。あれはジャミングだよ、ジャミング。まあこの物達を倒せば戻るがな。ま！君達が戦隊や仮面を倒せるかどうか見させて貰おう。て魂胆だぜ？どうだ！スゲぇだろ?!」
「はぁ‥‥‥　ま、倒してやんよ!!いくぞ!!」
信長「うむ！少し空気だったがこれで巻き返してやろう!!」
シネマ「フハハハハハ!!行け!!鎧武、龍玄!!そしてバロン!!」

――――さあ、超えてみよ。人理はもう、ねじ曲げられている。

［グダグダ本能寺編］矛盾だらけのベストマアッチイ!!フハハハハハ!!!

―三人称視点―

作業員事，仮面ライダービルド，。信長事，仮面ライダースペクター　信長魂，。そして彼らが戦う相手は黒いモヤを放つ，鎧武，龍玄，バロン，。戦う彼らは戦い続け、遂にはそれぞれのバイクに乗りながら城下町を目指してレースを始めた。

「くそ!!行かせるか！」

鎧武「……　?!」

ビルドは鎧武を行かせまいとバイクをラビットの脚力で無理矢理浮かせてバイクの前輪で鎧武を撃ち落とす。そのまま鎧武を弾く。すると鎧武は泡が逆流するように消えていく。

バロン＆龍玄「「……　!!!!!」」

信長「そんなことをさせる訳がなかろう!ま、是非もないよね！」

「俺も援護する!!」

何かをしようとするバロンと龍玄を信長は，ガンガンハンド，ビルドは，ドリルク

ラッシャー，で狙い撃つ。すると地面が爆発し、バロンと龍玄は吹き飛ばされ。終いには二人に弾かれてあわの逆流になり消えていく。

そこで二人はバイクを止め、変身を解く。因みにベルトなどは消えていった。

「ふう、これであの三人は倒したか……　だけど手応えは無かった。多分偽者だと思った方が良い。あのシネマって奴の力で創り出されたかもしれないしな。」

信長「しかし如何する？これでは特異点を修復できん……　ぬ？な、なんだこれは？」

「な?!レイシフト？……　まさか誰かに聖杯を……　まずいな。」

信長「まあここは亜種だ、本来無いはずの特異点でな。まあ、この際良い。あと一応だがどさくさに紛れて御主のパスに無理矢理繋げて御主のサーヴァントになったからの。」

「……　ウェイ？」

そして彼らは元の時間へと戻される。

―捻曲特異点　ぐだぐだ本能寺　修復を確認。フェイズを移行します―

「……　ぬお?!」

信長「お、起きたか。先程言ったとおり儂は御主のサーヴァントになった。」

「唐突だなぁ……。」

俺が目を覚ませばそこは自室。真っ白で質素な清潔が保たれた部屋だ。

だがあの頃より廊下は騒がしく色々な声が聞こえる。立香のサーヴァントだろう。

「なあ、俺は何時まで寝ていた?……　三日ぐらいか?」

信長「違う……　三カ月じゃ。その間に立香達は次々と特異点を修復していったぞ?まあ、儂は御主が心配だったからここに居たがのう。じゃが、御主に冷たい奴らが多いだろうな、御主を良くないと思った奴らがあること無いことベラベラと言いふらしたからな。気を付けとくのじゃぞ。」

「そいつら後でヤベーィしてやろうか。……　ん?」

そう話していると扉の隙間から覗く者が居た。

ダディバナ〝ザン〟?!ナ〝ン〟デミデルン〟デズ!!……　彼奴等居ねぇとしまんねぇぞこれ。

「ちょっと食道行ってくる……　変身しといた方が良いかな」

［ラビット!タンク!ベストマッチ!!Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?］
［鋼のムーンサルト!ラビット!タンク!イェーイ!!］

食道のドアって自動だっけ?まあ良いかと思い入ると異質な目で見られるがサーヴァントと思われているらしく何も言われずに無視される。あれ?!俺サーヴァントじゃないよ?!

エミヤ「おや、新しいサーヴァントかね？私は・・・・」
「この声聞いてもサーヴァントって言う気か？赤レンジャー。」
エミヤ「誰が赤レンジャーだ!!誰が!!・・・・　まあ目を覚ましてくれて有難い限りだ。手伝いを後々頼みたいのでな・・・・　それで何を食べに来たんだ？」
「取り合えずハンバーガーで・・・・・　あ、チーズな。」
エミヤ「そのぐらいならもう馴れている・・・・・・・・・・・　ほら、持ってけ。」
「済まないな、あと少しは緊張解せよな。」
そう言いながら変身を解いて出されていたトレイを持って適当な席に座る。
無言でハンバーガーを食べるどっかで見た奴が目の前で他の物達と頬張っているがそこは気にしてはならない。そう、例え取られようとしても防げば良いのだから。
そう思いながら自分は味わうように食べる。俺は味わうのが好きだからな。
アルトリア？「モッキュモッキュ」
「ハフハフ」
いや、気になる!!いやまあ、あの時倒した奴が目の前に居るので気にならない方が可笑しいんだよなぁ。だが油断していると危ない。変身出来るとは言え今は怪人主体でやるしかないからな。
「モグモグ・・・・・　やっぱりあんたなのか？」

アルトリア？「モッキュモッキュ・・・・　そうだ。あの時はよくもやってくれたな？」
「知らん。あとあんたを何て呼べば良い？闘うときに不便だろ？」
アルトリアオルタ「アルトリア・ペンドラゴン・オルタ。オルタと呼べ、仮面よ。しかし、あの時より落ち着いているではないか？仮面、貴様は寝ている間何があった。聞かせろ。」
「夢じゃない。レイシフト先で起こったんだ。その当たりは信長に聞け。俺はそろそろ戻るしな、ずっと此所に居ては的になるだけだろう・・・・　私怨のな。」
アルトリアオルタ「そうそう、隣の奴も紹介しておこう。此奴はジャンヌ・ダルク・オルタ。まあ、聖処女（笑）と呼んでやれ。」
ジャンヌオルタ「誰が聖処女（笑）よ!!このあほんだら!!」
これ以上は此所には居れない。そう思いながらトレイを戻してそそくさと自室に戻るため食堂を出て廊下をゆっくりと歩いていく。いろんなサーヴァントとすれ違うが面倒なので無視する。

扉を開けて自室に入る。すると先程居た信長の他にもう二人のサーヴァントが居た。
アイコン達が教えてくれているが彼らは沖田総司とメドゥーサらしい。
因みに何故か部屋の真ん中に置いてある炬燵に三人とも入り浸っている。
「沖田総司とメドゥーサか……。」
沖田「あれ？お会いしましたっけ？まあ、私は一流サーヴァントの沖田さんですとも!!あとこちらはメドゥーサさんです、三人で何故か集まってしまうんですよねぇ。お邪魔して住みません。」
信長「おい沖田―。そのミカンは儂のじゃ。」
沖田「え？…　あ、すみませんノッブ。」
メドゥーサ「全く。貴方達は少しぐらい……　あ、先程ご紹介されたメドゥーサです。」
「自由だな……　あ、そうそうここのマスターは女か？」
メドゥーサ「はい？女ですけども……　あ、いえ。どちらのマスターですか？」
「何？立香以外に居るのか？」

可笑しい。確かにあの爆発で活動できていたのはマシュちゃんと立香だけだ。
しかし冷凍保存されていた者が出て来ていた可能性もある。だが油断は禁物だ、もし信長や立香、所長にマシュに危険が及ぶなら怪人の仲でも選りすぐりで選んだ奴らで消してやろう。
信長「御主なら解ったと思うが一カ月前に一人だけ男の者が一命を取り止めたんじゃ。しかし性格が問題でな、何故奴がサーヴァントに好かれているのかが解らん。」
「ほう……そいつは手を出していると？」
メドゥーサ「えぇ、そう見といて良いでしょう。あの人はどこか変態な目で女サーヴァントを見ていました。しかもあの目線。凄く寒気がするんですよ。」
沖田「あぁ。メドゥーサさんもですか。あの人は何時かマスターに手を出しそうですね。」
その言葉は聞き捨てならん!!処す？処す？炙る？取り合えず処刑で。
と言うかもう今頼れるのって怪人化位しか無いのよね。どーうしよ。あ，ハイドロゾアロード，何てどうか？ハイドロゾアロードは動きが遅いし不気味だが瞬間移動できるからもってこいだ。
と、言うわけでハイドロゾアロードに！ヘシン!!
信長・メドゥーサ・沖田「ウェイ?!ダレダアンダイッダイ?!」

「クラゲとかの祖であるハイドロゾアロードです。中身はそのままだ！」
信長「クラゲとかの祖とな……　ん？髑髏混じっておらぬか？顔。」
「気にするな!!気にしたら負けだと思え！あとこの状態であんま話したくない。」
その後、俺の能力を色々と話し、後は信長にまかせ俺は瞬間移動で運動場とも言えるシミュレーションルームに移動する。

瞬間移動すると何かマスターらしき男にいきなり殴られた。
常識考えろや!!こちとら祖何やぞ！アンノウン何やぞ!!（ヤケクソ）
しかし雰囲気出したいから喋らんぞ!!
「……」

男マスター「オリャア!!……　てえ?」
「人間と言う者は出会い頭に殴るのか?……　キエロ!!」
取り合えず殴り飛ばしてハイドロゾアロードの能力で雷を落とす。
すると彼の傍に居たサーヴァント達が築いて男を後ろに下がらせる。
う、羨ましくねえからな!!…　グスン（つд`）嫌がらせに雷落とす!!!
「邪魔だな……　ハァ!!」
???????1「はぁ?!」
2「ちょお?!」
「私はハイドロゾアロード……　クラゲの祖だ。名を聞こう……。」
モードレッド「俺はモードレッドだ……。へっ、ほんとに不気味だなお前。」
アストルフォ「僕はアストルフォ!……　まあまあセイバーそれは同感するよ流石に。」
「……　邪魔だな、しかし、心が躍る!!」
闘うことになったので瞬間移動で近付き思い切り二人共々殴り飛ばす。
そして吹き飛ばされた先の場所に連続で雷を落として追撃する。
いやぁ!!やあ!らあ!……　ハズかし。
「よし!!てめえ等絶対むっころす!!」

男マスター「ウェイ?!ボン〝ドダレ〟ダイ〝ッ〟ダイ!!」
「言ったろうがよ!!覚えろよ長いからって!!」

――――――あれ？私が望んだ未来じゃない？・・・　ヴゾダードンドゴドーン!!

ヒーロー対戦開幕！ウルトラマン―1

雪が積もる中一人佇む赤き外套の男。その男が佇む丘の周りには無数の剣。
無尽蔵に置かれ、未来も過去も関係ない。ただただ剣が刺さっている。
――この体は剣で出来ている
若き彼は剣を生み出す
――血潮は鉄で心は硝子
若き彼から広がる無限の可能性の一つの緑が雪を、青が空を覆う。
――幾たびの戦争を越えて不敗
世界は飲み込まれ歯車が落ち、若き彼の後ろに剣が刺さる草原が広がる。
――ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし
光が照らし、光と影を創りただす。剣が現れていくのを見届けていくように。
――但い手は此所に一人
男はゆっくりと未来の彼を見つめ、自分を見るかのように渋い顔になる。
――剣の丘で鉄を鍛つ

男は白い短刀と黒い短刀を手に握り駆け出し、過去も駆け出す

――ならば我が生涯は意味を不要ず

言葉が聞こえる ，その先は地獄だぞ， そして過去は答える ， 地獄はもう、最初に見たさ， 世界は変わり始める。過去と未来が居ることでパラドックスが起き、世界が微かにずれる。

――この体は、剣で出来ていた

――ジリリリリ!!

「ハァ?!…… ハァハァ……」

少年は敷き布団で目覚める、体を起こして周りを見ればいつもの屋敷であり自室。どこも夢のような世界ではなく、平和な日々の一時。少年は先程鳴った目覚まし時計を止める。

「夢‥‥‥　か。取り合えず時間だし着がえるか」

少年は立ち上がり穂群原学園の制服に着がえる。

着がえ終わると障子が開き、部屋に昨日泊まっていた後輩，間桐　桜，が制服姿で入る。

「先輩、おはよう御座います！ご飯出来てますよ！」

「お、有難う。今日何か奢るよ」

「うぇ?!／／／‥‥‥‥　えっとぉ‥‥　すみません！」

「え?.お、おい!?‥‥‥　何なんだ?.」

間桐桜は障子を慌てて締めて出て行く。少年はそれに困惑しながらも部屋に向かう。

部屋に付くと食卓には一般的な和食が置いてあり、保護者件クラスの担任の，藤村大河，が向かい側で新聞を広げて読みながら座っている。少年は座布団に座り、頂きますと言い何故か置いてある目玉焼きに醤油を掛けて口に運び‥‥‥。

「ブッ?!‥‥‥　藤ねえ‥‥‥」

「あーっハッハッハー！どうだシロー！.この前の腹いせに醤油とソースの中身をすり替

えておいたのだ！あーっハッハッハ!!」
「えー、と……　先輩？大丈夫ですか？口からソースが…」
「ん？あぁー…　多分大丈夫だよ」
――続かないぞ？世界は、宇宙は、未来は……。
「?!」
「?、如何したのシロー？」
「い、いや。空耳がしたんだよ藤ねえ」
「ふーん……　ねえ桜ちゃん？」
「?、なんでしょうか？」
「ゴニョゴニョゴニョゴニョ」
「……　?!／／／」
藤村　大河がゴニョゴニョと小さい声で間桐　桜の耳元で言うと間桐　桜の顔が急速に，ブロッサム，のように朱くなり顔から煙のような幻想が見える。すると今度は先程の空耳、否、禍々しい声が再び聞こえる。そして光りのような声も。
――お前は闇だ、この世の、この宇宙の、帝王だお前は――――マンだ
――『君は神じゃない、人であり、ウル――――』

学校が静まり夜になった時間帯、少年は先生の手伝いをし、帰ろうとしていた矢先。校庭で金属がぶつかり合う男が聞こえ、それが気になり少年は見てしまった。それを見た青のタイツのような戦闘服を着た男が急速にこちら側に来る。少年は心に恐怖を抱き校舎まで全速力で戻る。何十回階段を上った頃に廊下に出て走る。だがそれは……　余りにも無謀すぎた。

「ゲポォ?!ゲホッゲホッ!!」

「坊主、すまねぇが,,あれ,,を見られたからにゃあ死んで貰うぞ?」
少年は壁にへたりこむ。朱い槍が突き刺さっているのを青いタイツの男は槍を抜く。そこからは本来夥しい量の血が出るが何故か出ない。しかしもう男はいない。そこに居るのは死んだ少年が死んでいるだけ。
――『名を呼ぶのだ、名を、私の名を!声を!さあ、掛けろ。』
「あ‥‥ あ‥‥‥ ジー‥‥‥ ドォ‥‥‥!!!」
少年が呼ぶとそれに答えるように光に包まれる――――

「ジュエ!!」

――――その名は,ウルトラマンジード,闇と光の戦士。
少年、ジードは光の朱い玉になり校庭に向かう。

「ああ！もう!! 一体全体どう言うこと?!」
「マスター、奴が戻ってきたぞ」
「え?!もう?!あの子しんだの?!」
　あかいあくま。など言われている冬木の管理者，遠坂　凛，。彼女は魔術師であり今回の聖杯戦争の，アーチャー，のマスターである。先程まで学生を追っていた，ランサー，はいつの間にか戻っていて冷や汗が出ていた。
「マスターの嬢ちゃんとサーヴァント!!早く逃げろ!!ぐう?!」
　そう言うと吹っ飛ばされるアーチャー。その後ろには悪魔のような姿の青い目の，サーヴァントらしき，人型の何かが少し猫背のように棒立ちしていた。
「くそ!!じゃあな嬢ちゃん！あんたらも早く逃げろ!!」
「まて！……　くそ、逃げ足が速い，サーヴァント，だな。マスター！」
「……　待ってアーチャー。どうやらあいつは敵意は無いみたいよ」
　するとその人型らしき何かは光り輝き、そこに居たのは先程追われたであろう少年。しかし見てみれば血は出ていないが瀕死に近い状態だった。遠坂凛は少年に近づき顔を確認する。アーチャーは顔を見た瞬間霊体化する。細かく言えば少年が彼だった事を確認したらだが。

「生きてる？‥‥　取り合えず衛宮君を連れて行かないと‥‥‥　あ、家どこだっけ」

彼の名はウルトラマンジード。光と闇の巨人。そして人の名，衛宮　士郎，、その背中には赤い血に隠れて見えないが，スターマークのような令呪，が微かに光っていた。

一方その頃土蔵の中で魔方陣が起動していた。

――待っていろよ‥‥　我が息子よ‥‥　!!!シェア!!

新たな特異点　騎士と魔方

やあ!……　うん、うん、解るよ?主人公である自分の性格が変わりすぎてるの解るよ?……　まあ、サーヴァントの視線がキツいから服装をＤｒ．パックマンにしたり口調をラスボスっぽくしてみたりしたが無理でした。もうやだ（ｒ・ω・ｒ）

あと今は

「で?何だエミヤん。俺は今エボルドライバーをあそんでいるんだが」

「そうじゃそうじゃー!こっちはエボリューション探してるんじゃ!!」

「そうは言っても新しい特異点に動向して貰わねばとＤｒ．ロマニがだな」

「……　サーヴァント召喚させろ……　召喚させろ!!!」

「あぁ、わかったから。掛け合うから落ち着け、な?」

と、言うわけで何やかんやでエミヤんが掛け合って召喚する事になったのだが……。後ろからの立香ちゃん達の爆死しろ的な目が怖い!!いや、まあ呼び出すのは別時空の人間だから爆死とか関係ないから、うん。

「さあ、ゲームを始めよう!」

そうかっこつけながら聖晶石を投げて召喚するとそこに立っていたのはｆａｔｅ／元祖の主人公。衛宮士郎のＩＦの存在、因みにこの衛宮んはウルトラマンジードだぞ!!クラスは［？］。まあ、タイプチェンジするし仕方ないよね。

「俺は衛宮士郎、普通のウルトラマンさ」

「ウルトラマンは普通では無いと思うぞ？私がマスターだ」

「あぁ、いつもマスターってこっちも言われてたから名前呼びで良いぜ」

「……　まて、まてまてまて!!また身内が増えるのか?!」

「士郎……　士郎なのですか!!」

「ん?て、セイバー?!」

まあ、衛宮んに突っ込んでくるのはセイバーの派生も一緒に何ですけどね。あ、衛宮ん押しつぶされた。と言うか男マスターが色々と突っかかって来たが無視無視。屑の

極みの言葉なんぞ知るか。
「ん？ジードのカプセルにはサーヴァントまであるのか？」
「あぁ……　これは親父を倒すために力を貸してくれたサーヴァントだ」
衛宮んが取り出したのは第五次聖杯戦争のサーヴァント達が右腕を挙げている絵が描かれたカプセルだった。言うなればサーヴァントカプセル、通称，ｓカプセル，だな。
だがこれは良い戦力だ。後々に始める為の準備に組み込まなくてはな！
Ｄｒ．ロマニ「もう話しても良いかな？えーっと今回の特異点、とても異質なんだよ。だから彼に来て貰ったんだ。そもそも彼が居なくなってからは全然余裕がなくてね……　ハハ」
「ほう、私が居なくては楽じゃないと……　で？特異点の名は？」
Ｄｒ．ロマニ「特異点の名は――――――――，亜種特異点　魔我ノ機士浸大戦，と言う」

ふーん、ん？あー、今の機士は心当たりが……。さて！問題です！機動と言えば？そう！ガンダム!!……　なのだが自分の能力は，変身，である。そう…　変身である。変身と言うのは色々と例外があったりするのだが……　何、機動戦士になってもかまわんのだろう？

Ｄｒ．ロマニ「じゃあ今回もたのむよ！……　一人で」

「解ってたよ畜生!!鬼！ロマニ！嘘つき！」

あー、皆さん。お察しですか？自分は特異点で生活しています。いや、うん。何年か過ごしてやっと連絡が来たんだよ、でも彼方では三日にも満たないらしい。悲しすぎる（，．ω．、）

しかもこの特異点と言うか世界は，幻晶騎士，となるものが…　お解り頂けましたよね？……　はい、，ナイツ＆マジック，ですよね本当に止めろや本当。

「すみませーん、この本くださーい」
「はいよ、来御付けてなー！」
「はーい！」
　因みに自分は小さい本屋を開いている。まあその本の中にはガンダムとかのロボット物とか有ったり色々と時代を壊しかねないと言うかもう壊してるような気がする物が売られている。
　椅子に座りながらガンダムが乗っている一覧本を読んでいると白髪の男？の子が押しかけてくる、因みに自分の姿はいつも通りの白衣を革にして顔には何もない顔に見えるような白い仮面を付けている。へ？不審者じゃないよ!!……　ま、まあ不審者と言われるのは致し方ないのだが。
「すみません!!ここがロボット倉庫ですか?!あとロボット物の本を下さい!!あとそのほかの物とか小説とか――――――」
「あー、君。ロボットを知っているのならこの，機動戦士一覧　大全集，ならどうかな？この本には色々なのがあってだな。例えばこのデンドロビウムとか――――――」
「おお!!何てロマン!!これこそ僕が――――――」
　そう熱弁しながら色々と大全集を開いて説明と言うなのロマンの言い合いをする。色々とあり最終的には本屋の裏手にある自分の家の自室で夜まで語りあった。

「――――――でだな……　て、もうこんな時間か。坊主、一人で帰るのか？」
「えっと……　あのー、泊まれませんかね？もっと話したいというか、語り合いたいというか、夜も相手したいというか――――――」
「まてまてまて。だんだんエスカレートして他人に聞かせたらやばい言葉に成ってきてるから口閉じろ。泊まらせてやるから、な？あと、俺のベッド使え。俺は床で寝る」
「え?!ですが――――――」
　で、何やかんやでふたりで寝ることに……。まあベッドの空きはあと二人ぐらいあったから別にいいんだが……。何か……　こう、近い。うん。寝るときは仮面やなんかは取ってるがこういうときだけ付けたい、穴があったら入りたい。そのあと結局一緒に寝て起きたときにはよだれ垂らして寝て抱き付いてきてきていて凄い心が痛くなって鼻血出そうになって初めて男に恋しそうになりました（・・ω・、）

未来に還る月光蝶

さて、前回から3年ほど時が経って何故か白髪の子、，エルネスティ・エチェバルリア，　が毎日来るようになっていた。名前が言いにくいが頭が良くロボット魂があるので共感が持てる。え？一緒に寝たよなって？……　何かに目覚めそうでした。それはさて置きここからが本題だ、私の家には地下倉庫があり、幻晶騎士が何体も入るでかさだ。うん？家の大きさ？立派な庶民の家だが？まあ地下が地下なだけに高かったんだがどうにかしたのさ。

話を戻すが今はその倉庫に居る。無論エルネスティと一緒だ。

「このターンＡなる物は等身大で見ると凄いですね!!」

言えない。倉庫に全ての機体があって物本があってそれを全て能力で複製したとは言えない。さらに言えば怪人体になってコピーした何て言う無いよ。一応脳には万能な事に能力の力が作用して良すぎて困るほどになっている。ああ、一人で全部やったとか言いたくない。

「出来れば設計図をあげたいのだが書く紙がなくてな。まあ、何かあったら貸してやる、しかし。分解するなら言ってくれ、部品やら何やらやるからさ」

「ほ、本当ですかぁ?!ではこの不格好なのがやけに格好いい∀ガンダムと言うのを作って貰うために設計図を……　いえ!取り合えず来て下さい!!」
「うお?!てをひっぱんな!解った!解ったから!ついてくから!」

さて、連れてこられたのは彼が作った……　と言うか鍛冶屋がやった幻晶騎士が座り並び修理されている工場的な所であった。そしてそのあと結局付いてきてしまったことに後悔している。
まず自己紹介をされた……　ような気がするが余分な分は記憶しない派なので，親方，とかそこら辺しかと言うか親方ぐらいしか居なかった。その後にエルネスティに急かされ、ターンAの設計を書き倉庫にあった物や部品やらを持ってこさせた。因みに持ち出す時、結構な騒ぎになっていたらしい。
「で、造り出すのはいいんだがこの無限動力は如何するんだ?」
「親方、無限動力はもう此方にある。と言うか殆どのフレームは出来上がっているから後は中身だ、中身は幻晶騎士と大まか同じで良いだろう。あと創れないなんて言うなよ

？」
「だぁい丈夫ですよ!!親方達と僕、そして貴男の力があれば必ず出来上がりますよ!!言ってしまえばプラモデル・
・・・　否、ガンプラですよ!!」
「エルネスティ。お前はいつも通りなのか？そこが心配だ」
「これがこいつの正常だ。諦めろよ、本屋の店長さん？」
「この世界は壊れているのか？」

その後∀ガンダムが完成した。その完成した瞬間に能力で持ってこさせた物を倉庫に戻し、自分は瞬間移動して倉庫に戻る。・・・・・・　やったぜ!!これで解放される！そし優越感に浸りながらてある物を取り出す。

「さて、この聖杯どうすっかなー」

そう、願望機である。この願望機はこの特異点の聖杯であり、あっさりと取れてしまったがためにしまっていた代物だ。しかし取ったところでこの願望機を持ち帰らなければ修正されない。

だが持ち帰らず使えばこの特異点は残ったままで一つの世界線として記録されるだろう。

そこを使えば奴を誘き出せるし、立香達が来る可能性が飛躍的に上がる。正に一石二鳥だ。

直ぐさま自分は∀ガンダムのコクピット部分に乗り込み、起動させて立ち上がる。因みに他のロボット達は異空間に転送済みで起動していない。

「さあ、世界を還ろ!!ターンA!!」

そう言うと∀ガンダムの目が赤く光り、その羽を出しながら天を上る。

「これが!!これこそが!!我らの意思、人類の可能性、見よ!!次元の者達よぉぉ!!これがぁぁ!!‥‥　月光蝶である!!」

――――その日、次元の壁は崩れだし、世界。否、地球、コロニー、銀河系が一つとなり。今正に，第一次ヒーロー大戦，が開幕するのだった。そして、７２柱達は新たな主を、宇宙の獣も同じく主を、悪達は月光蝶を崇めた。人類達は、宇宙の者達は、月光蝶を恐れ、，黒歴史，とし、その存在を悪とした。

英霊達は、彼を恨んだ、世界は彼を敵とした。悪達は彼を崇め、世界は彼を神とした。

第一章　藤丸立香と言うＩＦ

西暦１１１．２

，世界，は黒歴史の飛来により地球が何個もある世界へと変貌した。そしてこの戦争、否、この物語の主人公である藤丸立香を中心に回っていく。この世界はｉｆの地球で藤丸立香と言う存在が裏切られた事から始まる。

――――――――――――――――カルデアス：藤丸立香の自室――――――――――――――――

西暦１１０．／

藤丸立香。彼女は裏切られた、彼女は英霊と呼ばれる異質な存在と共に人理を焼却されたがために共に立ち向かってきた。たが、全ては仮初めの契約であり何かがあれば軸となった物を通して簡単に裏切る。正に今の状況がそれだ、いつの間にか一般人という立場になり、見ず知らずの女性がマスターとなった。

「……　誰か……　助けて……」

その声と共に薄暗い部屋に跳ね返る声、その部屋は藤丸立香の部屋であり、ただただ並んでいるショーケース達の中には色々な，ジオンのＭＳ，達が哀しんでいるように佇んでいた。

すると誰かが声を聞きつけその部屋は虹色の羽に包まれて光り輝く。

「だ……　誰…？」

振り向くとそこにはその姿は巨大で赤く目が光る影が居た。その影は手を伸ばし怯える藤丸立香に向け、虹色の粒子を放出する。その虹色の粒子は藤丸立香に吸収され、またあの暗い部屋に戻ってくる。しかし、藤丸立香の目は輝いているように綺麗で未来を見ているような目だった。

「これなら、この与えられた力なら…　!!」

藤丸立香はショーケースの中から，ＭＳ―０６Ｓ，を取り出し、そのＭＳに虹色の力を込める。するとそのＭＳは煙と共に，ＳＤ，に変わる。因みにＳＤは言ってしまえば二等親のＭＳである。

「ふう、やっとＳＤにしてくれたなリツカ」

「　・　・　・　。ま、まあこんな事も」

「本体がいないと些かあれだが最初に私を選んだと言うことで我慢しよう」

「え，？本体って何？……　シャｒ」

「言うな！……　それ以上言うと本体が来てややこーしくなるからそれ以上言うなよ！まあ、言うんであれば赤い饅頭とか，西，とかにしておけ。そうそう、間違っても私以外の……」

　そうＳＤ（二等親）化したＭＳ―０６Ｓ異シャアザクは藤丸立香にブツブツと言いながらベッドに座る。しかし藤丸立香はまったくそれを聞かずにＲＸ―７８／Ｃ．Ａと呼ばれる赤いガンダムを手に取りＳＤに変える。

「えーい☆」

「て、あ〝ー?!人の話をー!?」

「ふむ、先輩が先だったか……　だが、性能で勝てるかな……　来るか?!」

「一応私はガンダムを圧倒していたんだが……　やるか!!」

「仲良くしなさい☆」

「「タコス!!!?」」

　藤丸立香は喧嘩しているＳＤ二機をタイキック並みの回し蹴りをして二機共々壁にぶつける。因みに彼らＭＳ達はちゃんとした上下関係があるがこの二人と言うか二機は同一人物のため当てはまらないので同一人物同士で戦い始めるという自分殺しが発動する，まるで何処かの弓オカンのように。オカンのように！

「くふぅ……　まだだ、まだ終わらんよ！……　まあ、冗談はさて起き」

「（先輩）シャアザクそれ冗談だったの?!」
「本当に殺し合って如何する。ああ、そうそう…　近頃地球にティターンズが来るらしいからそろそろ脱出した方が良いぞ。あとこのギャグ混同シリアスも抜け出すため手始めにザクＩをだな」
「まって、話がわかんない」
「そうですね先輩。あとザクＩは立香の能力で多分実態化出来ると思うから良しとしてその後に出会う物達がどう絡んで来るかで……」
　説明しよう！実は密かに先ほど謎の電波を察知して言っているのだ！決してテコ入れとか、テコ入れとか、テコ入れとかじゃないよ?うん。違うよ?
「あからさまにテコ入れ何だが……　まあ良い。取り合えずリツカ、この旧ザクを外に行って……　あー……　いや、乗っているように念じてこのまま１／１スケールで出してくれ。無論私達を抱えてな」
　そう言われて藤丸立香は困るが言われるがままに念じる。

―宇宙　地球重力圏内外―＊見やすくするため表示形式を変更致します＊

言われたまますると何と！いつの間にか旧ザクに乗っており、更にＳＤだった二期や一部のガンプラ達が１／１スケールで実体化していたのだった！

藤丸立香

「だ、脱出しちゃったけど良いのかなぁ」

ザクⅡＳ

「何、心配することはないだろう。一応治してきたんだ。大丈夫だろう」

ガンダムキャスバル

「反応だ!!」

リーダーザクⅡ

「了解、各員配置に付け！」

ザクⅡ×８

「「「「「「了解!!」」」」」」」」

何故か彼らが式を取っているが主的存在は藤丸立香である。もう一度言おう、藤丸立香である。ザク部隊達は４・４で別れてマシンガンを構え、ザクⅡＳはヒートホークを。ガンダムキャスバルは盾を構えビームサーベルを抜き、藤丸立香が乗る旧ザクはス

パイクシールドを両手に持つ。

藤丸立香

「行くよぉ!!」

ザクⅡ

「了解した!」

彼らはブーストを巧みに使い急に現れた謎の影のような生物をなぎ払う。

彼らの運命はどうなるのか……

第二話

―神の世界　―

アテナ

「はあ・・・・　またやったんですか?」

存在X

「すまん、こればかりは言い逃れ出来ん。私の部下が招いた事だ」

神殿で話し合う，戦いの女神アテナ，　，人に神を知らしめる者　存在X，と言われる二人の神。これには訳があり、存在Xがいつも通り神を信じない者を転生させた・・・・・　のは良いのだが部下が勝手にその者に特典を与え、更には転生先を，ハイスクールD×D，に変化させて原作を崩壊させてしまったのだ。

アテナ

「まったく・・・・　特典が赤と白。更には主人公の立ち位置、その元主人公をその時代に転生させない・・・・・　あとはお決まりな者ですのでどうでも良いのですがこれはないでしょう」

存在X

「ああ、なので取り合えずこの元主人公の面倒を見る者なのだがな……　見間違いであって欲しいんだが……,,　とな……　如何すれば良い？」

アテナ

「しりません。自分で何とかしなさいロリコン」

存在X

「そんな殺生な!!」

―???―

彼は気が付けば知らぬ場所にいた。彼は思い出す、悪魔となり戦う時を。赤き龍を纏いし戦士となり白き戦士に戦いを挑む夢を。世界を，おっぱいドラゴン，として回る夢を。

しかし彼が居るのは摩訶不思議な惑星、不思議な虫がいたり人が居たり。彼の記憶に

一切無い世界。しかも赤ん坊ときたのだ、あーうーぐらいしか喋れないだろう。
黄衣の王
「ほう……この，ドリームシティ，に神の子な……羊よ。この者を連れてゆけ」
羊
「――――――――――!!」
彼を連れて行くキメラのような羊と呼ばれる生物、そしてそれを指示した，黄衣の王，。彼が連れてゆかれたのは神殿のような場所。誰一人も居なく、いつの間にか彼は抱き上げられている。
するとと神殿の奥から泡に目が付いた異質な存在がいつの間にか無から現れた。
黄衣の王
「父上。せめて実態で見てくれませぬか?」
???
「ふははは!!話が息子の化身ながらあっぱれじゃのお?それとその落とし子を地面に置いてはくれんかの。その落とし子な特別に，オーディン，と，ゼウス，に頼んで此所に来て貰ったのだからの」
黄衣の王
「父上。何故この落とし子が特別と?」

???

「その落とし子は別世界の神に見放され転生者の願のせいで押しのけられた存在。しかしその存在はいずれ龍をも呼び寄せる神に近き存在の生まれ変わりであり、邪神と神の間に揺らぐ意思。」

そう長く話していると居たる影が一カ所に集まり一つになり異質な人型になる。そしてそれを追うかのように神殿の蝋燭が意思を持つように増殖し、増殖した炎も異質な人型となる。

更に神殿の床が染み出して水が溢れ出て蛸のような怪物になる。

???

「ほう、よう来たな。ナイアルラトホテプ、クトゥグア、クトゥルフよ。」

ナイアルラトホテプ

「よお，ヨグ＝ソトース，のジジイ元気か？俺は最近分身で遊んでるよ！ヒャハハ!!」

クトゥグア

「貴様、少し調子が良いと言って無理をするな。また燃やすぞ？」

クトゥルフ

「しかし最近になって日本と言われる場所で痛い目見るぞ。精神的にな」

ヨグ＝ソトース

「ＨＡＨＡＨＡ！……　まあ、自然に御主等は集まらんから儂の力を使わせて貰った。これから話すことを聞いて貰いたくてな。近頃地球を基準とした生物が新たに来る、聖書の物達だ。この事は天照大神等の神や妖怪達には伝えておる。いずれ来たる世界の結合の為に我らの力を注ぎ込む。やるぞ」

ナイアルラトホテプ

「……　確かにそうだ…　な。俺らしくないが今回は従う。お前らは如何する？」

クトゥグア

「珍しいだろうな、貴様が従うのは……。親父、我は賛成だ」

黄衣の王

「ふう……　この体を通して力を与えれば良いだろう」

クトゥルフ

「私も無論賛成です。この赤子には興味をそそられる」

ヨグ＝ソトース

「ああ、さあ注ぐぞ……。，我が地球の四つの勾玉　眠りして全の力を，」

四っつの力は注ぎ込まれ、赤子は綺麗な女性のような体つきに形が変わり、髪は伸びる。服なんて物は無い、神々が想像して造り出され、産まれたままなのだ。その赤子だった彼は意識を覚ます。

「ここ、は？……　目が開かないよ……　でも、見えるのは何で」
そこには誰も居ない神殿だけ、傍に何故かある本を手にして外に出る。
外には何もないこと闇がただただ広がり光が一筋あるだけ。
彼は歩き出す、その光に進む、[ネクロノミコン]と心の中にあるカードを持ちながら。

―???―
付いた場所は荒廃し、空が黄色い世界。それを無視しながら彼は瓦礫に座りネクロノミコンを読み始める。そう彼が読んでいると後ろから，黒い影に近い何か，が色々と集まりだして一緒に読み始める。終いには西部劇のガンマンをデカくしたような者やその他諸々……。

「貴方達……　誰？」
　ガンマン
（私はシャドウという種族です。所で服は如何したのかね？）
「服……　あ、忘れてた。取り合えずこの白い布で……」
　ガンマン
（今どこから出したの?!）
　彼は無意識に布を適当なところから取り出す。端から見れば生成されているような物だろう、だが彼はそれを気にせずに何処かの絵に描かれていそうな感じで体の見られたくない部分だけ隠す。布は何故か固定されているかのように落ちない、原理はどうなっているのとか考えないでほしい。
　ガンマン
（あー、そうだ。マヨナカを知っているかい？）
「知らないし聞いたことも無い。後この子達可愛い」
　ガンマン
（知らないのか……。それ可愛いの？私には神話生物的な何かにしか見えないけど）
「私にはネズミ。可愛い可愛い、モルモット」
　ガンマン

（うん！何か違うね！）

―数億年後―

そこはもう以前の場所ではない。崩れた街並みが広がり赤い空が見える。

もうそろそろだと彼は思う。今の彼の服装は流れ着いた何処かの女物の制服。

「私はいつまで此所に居れば良いのだろう。真実は何処なんだろう。ああ、あの子達は居なくなった……　私は誰なんだろう、世界は何だろう。世界は何故一つにならないんだろう。」

!!!

「やはりですか……　真実はどう見続けるおつもりで？」

「世界はクソとか言ってる奴は，虚無，。私は，夢幻，。世界は神が居なくても回り続けて世界は一つ。世界は回る廻る、真実に夢を。」

!!!

「……　なるほど、では観察に戻りますので管理は宜しくお願いしますね？」

「りょーかーい。で、私のペルソナはいつ？」

!!!

「あ……　忘れてました」

いつの間にか現れた着物を着た白髪の女性。その名は!!!、解る人なら解るだろう。その女性と話し，ペルソナ，の事を話す。この事に対して!!!は……。

!!!

「てへぺろ☆なーんちゃって！」

「ぶち殺す!!」

!!!

「解った解った。取り合えずシャドウ探してね、あとダーリンがペルソナとして，鳴上悠，に付いたからそこんとこ宜しくねー！……　誰だ今私のことＢＢＡとか言ってやがるクソは!!」

「落ち着いて。……　取り合えずその鳴上君を探せば良いのかなぁ」

!!!

「んじゃ！バイバーイ！」

そう言って女性は光と共に消える。見届けた彼はキャラが安定してないなと思いながら落ちてきた人間を探しに、また歩き出す。’影’は彼について行く、意思を持つのは一部のみ。

影は人のような存在であるために意思は持ちやすい。だがそれはあくまで意思だ。意思を持つが感情は元の人間の物にる、複雑なのだ。

数百年感の間、彼は!!!と出会いこの一つの枠の世界を任された。更に内側に潜んでいたニャルラトホテプと出会う、その後そのニャルラトホテプと対に存在する’フィレモン’とお茶会。

フィレモンと親友となり世界を往き来できるとか言われて仮面を殴った。

更にその後嫌がらせかという感じでフィレモンの従者’イゴール’の面倒を見て欲しいと言われ、老人になるまで育て、それをフィレモンに伝えると上司にしてくださいと泣き疲れたのでまた仮面を殴った。

彼の目の前に一つの蝶がフィレモンへと変わる。

フィレモン

「呼んだかね?」

「呼んでない、そしてペルソナ渡せよコンニャロウ!」

フィレモン

「結果的には呼んでるじぁあな・い・か☆・・・・ ま、良いだろう君は，夢幻，を持つ不明のカード。ペルソナを見てみたい気持ちがあるしね、所でどんなのが良い？名前とかさ☆」

「えー・・・ と。あ，，ウツワノイザナギ，何て如何？何か露語がよさそう！」

そう彼が言うとフィレモンがカードを渡す。それには，聖杯のバックに宇宙の中心が書かれたカード，だった。彼はそのカードを蹴って砕く。砕かれたカードはイザナギのような姿で紫色、仮面等が金。そして両手などが黒い炎を纏い、神々しさを放って角が本来よりも長かった。

「え、これが私の可能性？」

フィレモン

「凄い可能性だね、でもそれは君だ。ま、頑張りたまえよ☆」

「ヴェ〝?!ゾンナ〝!!ヴジャゲルナ〝!!このバカ部下が!!!」

フィレモン

「ペルソナは痛ぁい!!」

彼はフィレモンにウツワノイザナギで蹴っ飛ばす。フィレモンが地面に刺さったところでウツワノイザナギを閉まってまた歩き出す。彼の後ろから呻き声が聞こえるが彼は気にせず歩く。

ある日彼がいつも通り散歩しているとベルベットルームに行ってくれないかとフィレモンに言い渡され、それでも部下かと仮面ごとペルソナで殴り飛ばしベルベットルームに向かっていた。

鍵を使い見つけた扉を開けて中に入る

「来たよー」

イゴール

「おお、お久しぶりで御座います、この度はどの様な用事で？」

「部下に頼まれて仕方なく来たの。本来なら散歩してたんだけど」

イゴール

「それは、我が主がご迷惑をお掛けし申し訳御座いません。あとどうせ来られたのですから私の秘書達を見て貰えないでしょうか。ここ最近部屋を壊されるので戦闘室を作ったらそこで殺りあっているので」

「あー、喧嘩するほど仲が良いとか言うけど流石にね。解ったわ」

イゴールの案内の元、戦闘室に向かう。え?ベルベットルームは人それぞれの世界だろって?……この世界のベルベットルームは予め作って出してるんですよ……多分。

そして戦闘室の扉を抜けて降ってきたのは

９９９９のメギドラオンだった

第三話　ＧＯＬＤＥＮ

「で？どう言うこと？」

彼は今、後ろにウツワノイザナギを出しながら説教をしていた。

説教されて正座しているのは，エリザベス，そしてその姉，マーガレット，。前回のメギドラオンはこの二人の者であり、プリンを食べたか何かで揉めて争ってメギドラオンを出したのだ。

エリザベス

「えー、と……　これはですねぇ……　食べ物と申しますか……」

マーガレット

「え、ええ。食べ物の恨みと言いますか……。他愛のない喧嘩と言いますか…」

「……　はあ、解ったら練習する!!」

エリザベス　マーガレット

「「は、はい!!申し訳御座いません!!」」

そう言われ二人は扱い馴れていないペルソナを制御する訓練に戻る。その姿を見ながら彼は喧嘩するほど仲が良いとか思っていた。

「さて、イゴール。そろそろ客人が来ますよ?……　神に選ばれた者が…　ね」
　イゴール
「畏まりました」
「そして警告です。カルデアの者と邪神が関与しました。来おつけなさい」

　新幹線の人が少ない中、田舎に向かうために座っている彼、鳴上悠。彼は両親が海外出張のため1年間だけ母の叔父の家に居候する事になったので今此所に居る。
　退屈しそうに空を見ると頭痛がして、，リムジンに乗る歳を取ったはながデカイ執事，と，女性と誰かが揉めている，そのような映像が見え、直ぐその後幻聴が聞こえてくる。

　　――イア！イア！

――――イア！イア！

その変な映像は何処かの宗教団体の映像。だがそれは関係なと窓を見ながら黄昏れる。そうしていると携帯電話にメールが届き、駅の正面で待っていると届く。色々と考えているといつの間にか駅に着く、忘れ物がないか調べ忘れ物がないと解り、安心して下りる。

＞（これが田舎の空気・・・　以外と良いな。都会よりも涼んでる）

駅員のおじさん

「おはよう。こんな田舎に如何したのかい？」

＞おはようございます。少し叔父に世話になることになりまして

駅員おじさん

「おお、そうかい。こんな田舎だけどゆっくりしてきな！」

＞有難うございます。では

話しかけてきた駅員と会話を交わし終わる。その後駅の正面口から出る。
するとそこで声が掛かる。その声はたぶん叔父の堂島遼太郎だろう。
堂島　遼太郎
「よお、写真よりも面構えが良いじゃあないか」

＞初めまして、よろしくお願いします

堂島　遼太郎
「ああ、よろしく。で、こっちが･･･」
そう言いかける堂島遼太郎。その後ろにいる隠れた少女を前に出す。
その少女に堂島遼太郎は挨拶しなさいと言う。
堂島　菜々子
「堂島菜々子･･･　す。よろ････　します･･」

＞よろしく、菜々子ちゃん

そう言われて菜々子は顔を赤くしながら遼太郎の後ろに隠れる。

遼太郎は恥ずかしいのか?と、ちゃかす。

堂島　菜々子

「・・・・・・・・・」

堂島　遼太郎

「よし、んじゃあ車に乗るか。お?・・・・　少しガソリンスタンドに寄るからな」

＞解りました

ガソリンスタンドに着き、遼太郎は電話。菜々子はトイレに行った。

鳴上悠は何もやることが無いので車の外で待つ。

銀髪の青年
「おや、君。見かけない顔だね、」

＞よくのこのこと……　殴られたいか？

銀髪の青年
「ふぁ?!ど、どう言うこと?もしかして何処かであった?」

＞会ったというかこれで何週目か解らないぐらい何ですけど？

実はこの鳴上悠。この世界を何回も楽しんでいるのだ、なので正直シリアスをこれ以上崩したくはないが崩すほか無いだろう。コミュＭＡＸでありながら全レベ９９。へ?何でそう言う設定にしたかって?ギャグ要素が足らなくなるんだよ！（・ω・）

銀髪の青年
「まあ、それなら良いか……　来おつけなよ?今回は色々な世界が干渉している。神や悪魔、天使と堕天使。別世界の物達に平行世界の物達がね？」

＞なるほど、だいたい解った。とりあえず仲間集めてお前をボコる

銀髪の青年
「え？酷くない？」

何やかんやあり、鳴上悠はこれから住むことになる堂島家の前に立つ。
ここからスタートだ！等と思いながら中に入り今まで通りに過ごしてゆく。

――――――原作終了後
全てが終わり、この前のように駅に行く前にガソリンスタンドに立ち寄る。
そしてこの前と同じように彼に会う。
銀髪の青年
「これからが本番だよ？帰ってきたらテレビに入りな」

＞おう、取りあえず殴らせろ。警告したくせにいつも通りだったわ

銀髪の青年
「うぇ?!またかい！……　でも、まだやり直してはいけないよ?言ったでしょ」

＞ふーん、期待しとく

銀髪の青年
「でも行かせないよ?」
ほのぼのな空間を引き裂くように銀髪の青年は言う。すると青年は手を鳴上悠に向ける、すると体が動かなくなり動こうとしても無理になる。その空きに町に緑色の光の壁を作り出す。
銀髪の青年
「済まないが今逃げられると困るんでね！」

＞クッ?!このナナコンを止めるだと!?

銀髪の青年

「君余裕だね……。まあ、色々とあって君の両親は帰ってきてないからまだあと1年此所に居ることになるよ？…　ごめんね？説明大変だろうけど」

＞ザッケンナヨゴラ（、Д、）

―堂島家―

色々とあり両親が帰ってこられなくなり、またお世話になることになった鳴上悠。鳴上自身は周りに言い周り、大変だったと、あの銀髪殴りたいと散々だった。

そんなこんなどっこいこいでも菜々子とまだ入れるので少し浮かれている。

堂島　菜々子

「お、お兄ちゃん…　まだ一緒に居られるの？」

＞おう、また一緒に暮らそう！

堂島　菜々子

「……　／／／」

＞（そういや何でこんなラブコメしてんだろ）

そうラブコメしていると玄関のチャイムが鳴る。今行きますと言いながら玄関に行き開ける。そこには自称特別調査隊の皆が居て涙目で押しかけてくる。

＞……　?!

花村　陽介

「あーいぼー!!!家族がなくなって戻ってきたんだろ?!」
　里中　千枝＆天城　雪子＆久慈川りせ＆マリー
「「鳴上君（先輩（悠!!誰を産ませたの!!」」
　巽　完二
「先輩!ダンスするために戻ってきたって聞いたっす!」
　白銀　直人
「先輩・・・・　誰を・・・　!」
　クマ
「だ、大丈夫クマかー?!ごりょうしんがー!」

＞待て、取りあえず女性陣に広まったデマについて小一時間問い詰めたい。

　里中　千枝
「デ、テマ?あー、あー・・・・　そ、そうよね!デマよね!」
　天城　雪子
「え?デマだったの?・・・・・・　でも広めたのって・・・」

＞……　そっとしておこう

第四話　募る者、始まり

――オールド・ワンが宇宙を支配していた時代、地球。空から光と共に巨人が降臨し闇を抑えたという。だが闇は抵抗し、分身である神を作り出して巨人が去った後。人々を苦しめた。だがそれと同時期，帝我，と呼ばれる巨人はその闇を取り込み石化してまた人々を守り世界に平和をもたらした。だがその行いはおろかな人間によって封印がとかれ，闇の巨人，が目覚めてしまった。世界はまた恐怖に落とされ――#ここから先は汚れていて読めない

ランドルフ・カーター

「また…　駄目か…　いくつもの資料にも此所で途切れているな…。やはり巨人が降臨したと書かれている場所に行くしかないのか…　？しかし日本には日本で探索者達が頑張ってくれているしな」

自室で資料を読み漁る人物，ランドルフ・カーター，。彼はつい最近発見され遺跡の古文を解読した、そしてあろう事かその文字は日本語だらけだったため奮闘している。

彼の友人である，ゴーストハンター（笑），等の力を借りたりしているのだ。

ランドルフ・カーター
「さて、連絡しておくか……　ｈｅｌｌｏ？」
『どうなされました？また，あれ，ですか？』
ランドルフ・カーター
「いや、少し違う。もしかしたら，あれ，を作ったこん畜生を見つけられる」
『あー、こちらでやるので他の仕事に当たって下さい。溜まってますよ？』
ランドルフ・カーター
「あ、うん。すまん」

―幻想郷―　八雲家

マヨヒガによく似た空間。そこには屋敷があり、外部からは入れず干渉できない場所。しかし造った者と認められた者のみが干渉を許される。

そしてその屋敷の縁側で座っている如何にも紫が似合いそうな女性にその，式，が近付く。手にはお茶が乗せられたお盆を持っている。，式，はお盆を起き、話し始める。

式

「紫様、ランドルフ様から情報が――――

世界はまた動き始める。

―ＴＲＰＧ世界―

ぐんまー・・・　それは大後悔時代ならぬ世紀末時代。文明は発達し、東京並み。しか～し!!ぐんまーには化け物揃いのより取り見取り!!さあ行かん!!

そしてそのぐんまーに住む者。

ジャギ

「あ〟　ーー!アヅイ!!群馬って寒いもんだと思ってたぜ」

ルビー・ローズ

「ほんとそれ!というか良いところにこの兄ヤンがいるじゃん」

ジン＝キサラギ

「誰がこんなんに使うか!!取りあえずはなれろ、ユキアサネぶっけんぞ」

あーもうすすまねぇなぁあ!!

付いてんのか?!あ、一人付いてねぇわ。まあんなことやっていると人が来る。女性でスーツ姿の女性だ。そして後ろには顔に時計を模した仮面の男が居る。

ジャギ

「時計・・・?あ（察し）」

チクタクスーツマン

「やあやあや!!私はチクタクスーツマン!!このガイドの主催者だよう!」
ルビー・ローズ
「いやー、やりますねぇ!デモなんかゲッダンしてるんですけどこのスーツマン」
女性
「私はその方の秘書です。メール通り館に招待しにきました」
ジン＝キサラギ
「・・・　!!ＡＰＰはいくつかね?」
えーと・・・　あ、１８出た――――――

どの世界も動く。

―怪獣墓場―

ウルトラマンベリアル
「ア゛ー……　怪獣墓場は今夏かー。メフィラス！お前以外は何処行った！」
メフィラス
「はあ、他の者は出張中ですので……　あ、でしたら別の宇宙何てどうですか？」
ウルトラマンベリアル
「またかあ……　取りあえず，ぶりーち，？て言うとこに……」
メフィラス
「陛下！流石に不味いです!!」

そう、動きだすのは一つじゃあない。世界は一であり無限である。
格闘の地でも、メダルを使うロボットでも。すべは動く。

――――フハハハハ!!これで私の願は叶った。来い、主人公達よ。

そう言い放つ者は半分機械の顔の目を赤く光らせ、フードを被り闇に紛れる。

その元には様々な悪達が募り、，鏡写しの者達，もその時を待っていた。

――――必ず来い、リツカ…　クハハ……　!!!

第五話　始まり、ＺＷＦ開幕

――――ある日世界は混乱した、それぞれの者。様々な機械、文明。地球。それぞれはひとつとなり、世界は何かを突き止めようとした。だがそれは虚しく達成されておらず、敵も居ない。だがこれだけの文明があると戦争もやぶさかでは無い。そしてその混乱の中。，ザ・ワールド＝ファイターズ，を開催する、主催者は，Ｒ，と名乗る人物。その人物は強気物達に手紙を送りつけた。

ある時、都市のテレビをジャックされ、人々は混乱する。

すると砂からしの映像がＲと書かれた者に変わり、渋い声が流れる。

Ｒ

「これより、ザ・ワールド＝ファイターズ。ＺＷＦを開催する。私の名はＲ。力ある者には手紙を送る、私は待っているぞ主人公達よ、それに引かれる者達よ・・・・　フハハハ!!」

それを見た三人の者達は心当たりがあるのか動じずに口を開く。

草薙　京

「あいつ・・・・　まだ懲りてねぇのか？散々自爆したり消滅したり復活して・・・」

二階堂　紅丸

「・・・　彼奴本当に毎回これだけのことだけやって自爆して復活するもんなぁ」

大門　五郎

「うむ。まるでギース・ハワードのようだな。だが、何回も倒すまでよ！」

そして始まる。世界は謎の組織，シャドルー，等が関わり始めているのを目の当たりにする。様々な場所には張り紙が出され、さらにシャドルーの部下たちや謎の秘書にＩＳ達が警備し始める。言ってしまえば警察の代わりに居るので警察より安心する。無論、ザ☆無能神奈〇警察以上だ。

段々とそれは案外すぐに染まり、普通になっていった。

そしてあるストリートでは一人のオーラを身に纏う吸血鬼がひの体を持つ物と共に闘っていた。相手は白いＩＳを身に纏う男と銀色のＩＳを身に纏う目が鋭い女性だった。

デミトリ・マキシモフ

「ククク、その程度かね？」

パイロン

「・・・　！、!!シャハハァ!!」

織斑　一夏

「グゥ!!くそ、かてねぇ!!と言うか火ってなんだよ?!」

織斑　千冬

「焦るな!!そもそも敵は人間じゃあない、心しとけと言っただろう愚弟!!」

黄色い閃光。拳と爪の斬り合い。炎と機械のぶつかり合い。

金色にひかり、炎を物理的に断ち切り、炎と吸血鬼は力を上げる。

織斑兄妹

「「グアァァアアアア!!!」」

そしてそれをビルの屋上で見ている豪華な装飾のローブを着た骸骨。その後ろには頭蓋骨が集まった何かがローブを着ている存在が佇む。

ローブを着た骸骨は振り向き、蛇をもした杖を何処からか取り出し、頭蓋骨集まった何かは大曲剣を取り出して両者はにらみ合う。その瞬間魔法の神々しい音と禍々しい音が鳴り響き、ビルが崩れ、両者は大空で斬り合い、魔法を打ち合い、大空は少しばかり大騒ぎになる。

この大会は生き残り主催者都戦う事ではなく、勝ち進むこと。勝ち進んだ者がいた。
平行世界であるＦａｔｅの，衛宮士郎　，藤丸立香（男），のチームでだ。
―航空機船内―

衛宮士郎
「ここは・・・・」
藤丸立香
「なんなんだ・・・　いったい?」
薄暗い中、歩いて行くと銅像が建ち並んでいた。その奥には主催者らしき人物が髑髏を模した椅子に座っており、足を組み。顔を下ろしながら選手が来るのを待っていた。
主催者らしき人物は渋い声で語る。
Ｒ
「ようこそ・・・・　我がコレクションへ。しょしょう手荒く拉致してしまった。誤ろう」
衛宮士郎
「Ｒ・・・　あんたは何でこんな事をしたんだ！いずれ世界は崩壊するかも知れないんだぞ！」

R

「ふん…　何故だと？まあ良い、君達には話しても良さそうだ。私はある日分裂したのだよ、神によってな。そのお陰で記憶すらも半身に引き継がれてしまった。だが幸いに君達の時空のお陰で半身と接触できた、感謝しているよ。そして立香君、君のｉｆが，シネマライダー達，と半身を倒してくれたお陰で私を取り戻した。更に私はあの憎たらしい奴らを殺すため、この大会を開き。地球の守護神を復活させるのが目的だ。簡単だろう？所謂復讐と言うやつだ」

藤丸立香

「そんなの自分勝手じゃないか!!そんなんでこんなことをしていたのか！それは―」

R

「身勝手だと？ふっ、戯言を言うな、所詮殆どの英雄等は自己満足などからによる意欲的欲求だ。例えどんなことで称えられたとしても、崇められたとしても。それは全て満たす為の偽善行為だ」

Rはそう言い終わると椅子から立ち上がり、構えを取る。

立香達はそれぞれのサーヴァント。，マシュ，　，アルトリア，を呼び出す。

R

「ふん、やはり値しないか。来い!!ゲムデウス！」

Ｒがそう呼ぶと一つの銅像が動き出し段々と，ゲムデウス，へと変化する。
その隙にＲは何処換えと消えてしまい、いくつかの銅像も形を変え遅い掛かる。
衛宮士郎
「クソ！行くぞセイバー！」
アルトリア
「ええ！行きますよ、士郎！」
藤丸立香
「俺達も行くぞ！一般人だってせめて援護ぐらいは出来る！」
マシュ
「はい！先輩！」

――世界はまだ。終わったばかり

第六話　砂浜の都市で

一面砂でできたエリア。そこでは民族や昔を思う人々が暮らしていた。
だがその平穏は一機の，ザクⅡ，と無数のモビルスーツ達によってぶち抜かれた、よく見れば，連邦軍，相手に戦っているようだ。指令を出しているザクⅡはとんでもない程のスピードで，ジムⅡ達，を殴り、粉々にしてゆく。その周りに居る赤いモビルスーツ達も3倍の速さで動き、蹂躙していく。
まさにそれは無双であり、太刀打ちできないとつくづく，連邦軍，は思う。
何処からか，ええい！ジオン軍のモビルスーツは化け物か！と幻聴が聞こえるほどだ。
ザクⅡ（藤丸立香　女
『そうりゃ!!』
ジムⅡ
『ナニィ?!』
ザクⅡ・S
『がら空きだ!!まとめて沈め！』

ジムⅡ　ガンタンク
『くそぉ!!』『解せぬぅ!!』
ザクⅡ（藤丸立香　女
『もいっちょ!!』
ジムⅡ
『ごだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!』
そう倒された者達は爆発し、，フルボトル，となり消滅する。

―砂漠の都市―
そこは様々な塔のような物で埋め尽くされ、人が行き交い、機械生命体が行き交う。
塔の中の一角。そこでも戦いは繰り広げられていた。

我愛羅

「ふん！」

ニンジャスレイヤー

「ＨＡａａａａａＡＡＡＡ!!忍者死すべし！慈悲はない」

我愛羅

「のうかががあ?!」

我愛羅はニンジャスレイヤーの猛烈な言葉や斬撃でフルボトルとなり消滅。しかしそのニンジャスレイヤーの後ろから呪腕のハサンが後ろから心臓を刈り取る。ニンジャスレイヤーもフルボトルとなり消滅する。

ニンジャスレイヤー

「ぐわー?!アッパレ！」

呪腕のハサン

「・・・　セ・・・　イハ・・・　イ」

呪腕のハサンはそのまま何かを求めるように闇夜に消える。

その後その部屋は変な声が聞こえるとして、恐がられたとかなかったとか。

―砂漠の都市　広場―

子供たちが遊ぶ公園、そこにはサラリーマンや家族ずれの人まで居た。

だがその静な一時をぶち破る者が現れた。

赤いローブの男

「ククク、機械チェンジ!!」

その男の体は段々と，フランケンシュタインを思わせる怪物，に変わり、ローブを脱ぎ捨て、公園に大量の釘を生み出して攻撃する。その攻撃で公園に大量の釘が降り注ぎ人々は逃げ出す。

「逃げろぉぉぉぉ!

「イヤァァ!

シュタイン

「ふはははは!!このシュタイン様に恐れおののき、絶望し!ファントムとなれ!」

するとそこへ，仮面ライダーウィザード，がバイクに乗り、，怪人シュタイン，を弾きウィザードガンで狙い撃つ。

仮面ライダーウィザード

「おいおい、絶望させるのはちょっと見逃せないな、，バダンの幹部さん?」

シュタイン

「ええい!!バダンではなく，ネオ　バダン，だ!オノレ仮面ライダーアァァアアア!!!」

仮面ライダーウィザード

「それは士に言ってくれ・・・　よ!」

ウィザードはウィザードガンを剣にして、連続で突く。しかしシュタインはそれを物ともせずにウィザードを吹っ飛ばす。だがウィザードは，ランドスタイン，に変え、対等に戦う。

シュタイン

「オ、ノレー!邪魔しよってからにいいいい!!」

仮面ライダーウィザード

「おお、怖い怖い、そらそら!!」

シュタイン

「ぬぉ?!なぁ?!ぐぅぅぅぅうわわわあ!!」

シュタインは剣の舞に押されていくが、シュタインは手の甲から釘を生み出し、それを殴るように刺す。その釘だけは貫通する。そしてその釘からエネルギーを吸い取り、ウィザードを蹴り飛ばす、その衝撃でウィザードは変身かが解け、気絶してしまう。

シュタイン

「ここは一旦撤退だな。そろそろ別の悪の者達を一刻も集めなければ・・・・」

その寸劇を木の陰から見ていた物が居た。

???

「・・・・　まずいな。こちらもスーパー戦隊と仮面ライダーを集めなくては」

そう言い見ていた物は気絶して居るウィザードを回収し、そこから去る。

―地下帝国　最深部―

R

「それで？私に何のようだ？」

椅子に座り、現れた者と対話するR。ここ、地下帝国は元は，バダン，が世界の死人と生者を反転させる為に作った基地を欠片一つから復元した物である。その地下帝国を指揮するのは数々の世界から来た，悪者，で構成されており、それを実現したのがRの後ろにホルマリン漬けにされている脳なのだ。

その脳の名は，アルファー，と呼ばれる者の本体。

アルファー

「・・・・　そうか、オール・フォー・ワン。どうかね？幹部になるのは」

オール・フォー・ワン

「それは恐縮です。ですがお聞きしたいのです。何故、世界と世界を？げたのかを。どうやって世界を？げ、ここまで安定した世界になっているのかを」

アルファー

「ふふ、世界は元々一つだ、私は戻したにすぎん。しかし大変だったよ、いかんせん世界が元は一つでも起源をもたらしめる物質があまり見つからなくてね？やっと完成したのが私の後ろにある，エニグマ，さ、これを使い起源を再び一つにした。そのエニグマは少々特殊でね。これは世界を？げるのと同時に安定化させ、圧縮出来るんだ。まあ、

これを壊されれば世界はまた別れ、圧縮された記録はパーになる。面倒な機械さ」
オール・フォー・ワン
「そうだったのですか……　では、，我々，ヴィラン連合はネオ　バダンの軍門に降りましょう。それと同時に我々の世界の技術等を提供します。それで宜しいですかな？」
アルファー
「ああ、良いだろう。君たちは栄誉ある存在になった。健闘を祈る」

――世界の歯車は曲がりだす。それが正常だと言うように

第七話　加速する世界

―基地―

ここはヒーロー達で構成された，ＳＰＷ，と呼ばれる機関の本拠地である。

ＳＰＷは世界が一つになったことで現れた過去、未来の怪人に立ち向かうため設立された。

所属しているのは，スーパー戦隊，を筆頭とする石ノ森ヒーロー達だ。

［緊急指令！町で暴れる怪人が多数出現！直ちに対応！対応！場所はメガトウキョウ！」

仮面ライダー１号

「何?!俺は先に行く！準備ができたらすぐに，メガトウキョウ，に来てくれ！」

その頃メガトウキョウでは様々な怪人達が暴れていた。だがしかし、戦いにより何人も消滅し、戦える者は彼等しか居ない。

イカデビル

「しねぇい!!」

「キャァァァァァァァァ!!

女性にイカデビルの鞭の手が当たろうとした瞬間一つのバイクにまたがるバッタのヒーローがバイクで弾く。そして女性を避難させ、イカデビルに怒りを表す。

仮面ライダー1号

「イカデビル・・・　!町を壊し!ましては市民を襲うなどと・・・　また地獄に送り返す!」

イカデビル

「ククク!!私はあのお方により復活したのだ!今度こそ消えろ!仮面ライダー!」

また別の所ではゴレンジャーが黒十字軍の総統と対峙していた。

アカレンジャーとキレンジャーは武器で多彩な攻撃をし、後ろからアオレンジャー、ミドレンジャー。モモレンジャーが援護しながらアカレンジャーとキレンジャーと変

わり代わりに攻める。
黒十字総統
「ぐう!!ぬおりゃ!消え去れ!」
アカレンジャー
「そりゃあ!!今度も倒してやる!」

ズバット
「ズバット解決、ズバット参上!快傑ズバット!!」
ただの怪人
「ナニィ?!首しめぇ?!」
ズバット
「二月二日、飛鳥五郎と言う男を殺したのは貴様だな!?」
ただの怪人
「はぁ?!んなもん知ら――――?!」
ただの怪人の首は飛び、血が舞い、そこに名刺のような者が刺さる。

［この者殺人犯］

市街地、そこに彼は居た。その姿はローブに包まれていて解らない。その向に立つのは最強の一撃男，サイタマ，。強靭な肉体とワンパンで全てを倒す彼は何処かヒーローの心が見える。

ローブを着た何か

「ほう、最強か……。強敵を求め此所に来たのか」

サイタマ

「よう、てめぇをぶっ倒しに来た。掛かってこい」

そうサイタマが言うとローブを脱ぎ捨てる。その下にあったのは銀色の肉体。スリムでありながらも何処か違和感を感じる、そして顔は半分が三つの目のような突きだしているレンズがあり、もう半分は機械と脳が見える。腰にはライダーベルトのような物

がある。

サイボーグ

「私はサイボーグだ。それ以上でもそれ以下でもない、行くぞぉ!!」

サイタマ

「おう、そうか」

サイボーグは一瞬で近付き、上に蹴り飛ばしてそれに先回りしてサイタマのマントを掴み、斜め上に投げ飛ばす。そしてまた一瞬で近づき、顔や腹を次々と殴っていく、それはまさに善戦。

そしてサイタマにかかと落としで地上に落とす。

サイボーグ

「何故……　無傷なのだ?!」

煙が晴れてみればそこには無傷のサイタマが居た。

サイタマ「こっちもいくぞ!」

サイボーグ

「なぁ!?――――――――――――――――――――ギィィィヤア?!

世界は混乱した。ヒーローと呼ばれる者と怪人達による総力戦、それにより被害は重なり殺伐としていた。その町を歩く人々には精気が無く、次々と力尽きていく。
その時、またヒーローが現れ、それと同時に突如塔のような物がそびえ立った。

――さあ、足掻け。物語は加速する
――我等の手により、人類は滅亡する。足掻け。
――足掻け。そうすれば救われる。戦え、戦わなくては・・・　生き残れない・・・・　!!

第八話　世界が終わる。（観覧注意）

塔の中、人知れず戦うヒーローがそこに居た。ある者は黒き剣と白き剣を操る者。ある者は右手で異能をかき消す者、或いは……。そう、ヒーローはそこに居た。

キリト

「はぁぁぁぁぁぁ!!!」

シャドウライダー

「ゴゥゥゥアアアオオオ!!!!!」

誰も知らない物語り、それは儚い者達が思っていた願い事。それを、彼は叶えた。それを止められる者は存在しないだろう。だがそれを否定し、過ちを正に来た者達は居る。

何十回と上がったところで目を開けられない女性が影として立っていた。

「汝は何を欲する?……　さあ、終焉の時。それをしかと見よ!!」

女性の体は宇宙の色になり、目が開かれる。そしてその後には無数の怪物達が居座っていた。だが彼らは向かう。誰かのために、人類のために、世界のために。何かを捨てても戦う。

仮面ライダー1号　仮面ライダー2　仮面ライダーV3
「「トリプル!!ライダー!!キィィィイイック!!」」
仮面ライダー1号
「ここは我々、仮面ライダーに任せて先に行け!!速くするんだ!!」

最上階。そこには真っ白いローブを来た男性が居た。しかし、そこに付いたのは但一人。英雄を従え、友として歩んできた少女。，藤丸立香，、しかし戦いでサーヴァント達は倒れてしまっていた。
「何をしに来た、俺を止めに来たのか?」
藤丸立香
「・・・　何でこんな事をしたの?!」
「またか・・・・・・　まあ良いだろう。私は本来、世界の歯車には当てはまらない存在だった、だが人間を見ている内に妬みや憎しみを知った。そしてそれを最も最適に調べるため人間として生まれた。だがどうだ?世界は歪んでいる、ならばとこうしたのだ・・・・。

おや、その顔は初めて見たよ、そう言えば私は名乗った事が無かったねぇ？私はヤルダバオトと言ってな、君達人間を統制するため生まれたのだよ!!」

彼はそう言った。確かに言ったのだ。藤丸立香はあのような姿をした彼が許せなかった。なぜかは解らない、でも解ったような気がした。彼は■■■■■■行員と名乗っていた人物だと。

藤丸立香は困惑しながらも震える心を抑え、あの頃の事を話し始める。だが。

藤丸立香

「ねえ、あの頃は楽しかったよね？色んな旅をしたよね」

「・・・・そう言えばそうだったか？別の私も居るのでね、どれがどれだか解らんがな。まあ但言わせて貰おう。君は何を望んでここに立つ、何故この楽園を汚す？ナゼ、ナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼ∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀」

彼の体は変わってゆき、，黒歴史，へと姿を変える。その黒歴史は黒いオーラを放っており、見るだけで吐き気を催す。禍々しくも神々しく、それは体に馴染んでいて体をまさぐり回し首を絞められるように息苦しなって行き、遂には立てなくなる。しかしそれは幻影。実際は倒れては居ない。

有勇気を絞り出し、藤丸立香かは向かい合う。

『刻め』
そう聞こえると肩に斬撃が走り、そして腹、更には顔などと血を吹き出してしまい倒れる。しかし気付くと無傷で立っていた。それを体験してしまった藤丸立香はそこに吐いてしまう。
そしてまた体が弄られるような感覚が来て、気絶する。だがそれが無かったように立っていた。下にはまだ吐いた物があるので幻覚だろう。
『我らは汝。汝は我ら、貴様は私でありながら私である。・・・・貴様は一人だ』
そう聞こえると周りが暗くなり、皆が離れる幻覚が見える。すると後から青白い手が藤丸立香の体を掴み、闇へと沈んでいく。誰か、誰かと涙を流したが誰も手を出さず引きずり込まれる。
引きずり込まれた先は・・・そこで幻覚が解けて、段々と顔が青ざめる。
藤丸立香
「あぅ・・・・・アアああアアアアアアアあああ?!!!!!!!!!」
『狂え、狂え、刻め。ワガキョウフヲ』
藤丸立香
「アアアアアアァァァァァァァァァァァァァアアアアア?!!!!イダイイダイイダイイダイイダイイダイイダイイダイイダイイダイイダイイダイイィィ!!!ヤダヤダヤダヤダ!!」

『吐け、すべて』

藤丸立香

「ううぉぷ?!オロロロロロロォ・・・・ ウェック・・・・・・ らめてぇ・・・・・・ ウォォォロロロ」

『ククッ!!快感を、痛みを、吐け。刻め』

藤丸立香

「イグァァァアアア!??イダイダイダイイダrウォロロロロォオオォぉっぺゥオオロロロイグイグイグ!!イダイダイダイイダ!!!イ・・・・・・ ダぁぁぁあ!!」

『ふざまな者よな。精神は赤子だな、貴様は弱いのだ。聞こえないだろうがな』

藤丸立香は無残な姿だった。快感でイキ狂い胃にある物をはき出し、痛みで血を出す。だが体は無事だろうと。これは全て幻覚だろうと。しかし苦痛の中、目を何とか動かすと・・・・ 全て本物だった。服は散れじれになり生まれたままの姿で風が体を切り刻んで刻まれたどこから血が滲み出し、快感が襲い痙攣が続く。とうとう目も動かせなくなり快楽に身をまかせてしまう。

『貴様は負けた。・・・・ 消えろ、敗者は必要じゃない』

そんな中それが全て止まり、普通に動かせるようになったが体が段々と灰になっていく。その時聞こえたのは彼の声だった。[ゴメン」そう聞こえたのだろう。しかし灰になるのは止まらない。黒歴史はそれを抱き上げる。そしてギリギリと・・・・・・ 潰れて

しまった。

［ねえ作業員さん!!］

［ん？何だ？］

［新し■■■■■■■■■■］

『私は……　世界を……。……　ああ、そうか』

彼は何かを思い出した。それと同時に世界は灰となって行く。

――――如何だったかな？

「なんだ……　俺は何をしていた？」

――――クククク……　ハハハハハ!!!玩具君!!よくやってくれたよねぇ?!ありがとう。お礼を言うよ？だって世界を消してくれたからねぇ？残念だったねぇ。これはね、神々の実験さ!!まあ君が居た世界は一つの物語に過ぎない。どうする？別の世界に行くかい？

「俺は・・・・ 何者なんだ？」

――ヒャハハァ!!ああ、そうだったね。最強の人類君。君は元々別世界線であるハイスクールD×Dの主人公!.兵頭一誠，さ!!ねえねえ、君は彼らを殺したんだよ？.運命は決められてたんだよ!!.君の妹が死んだことや君がこう世界を滅ぼすことも!!・・・・・・ねえ玩具君。

「何だよ・・・・ ハハ・・・・・ なあカミサマぁ・・・ 俺は何処に行けば良い？.」

――今度はねぇ・・・・

結局彼は全てを殺した。ただの玩具になった。

――ねぇねぇ・・・・・。これでずっと・・・ いっしょだよねぇ♡

彼は壊れた。

第二章なんちゃって予告

主人公
「へい!!久し振り過ぎる俺ちゃんさんじょうぅ!!!いやー、闇落ちしちゃったからなー。あ、そうそう。第二章は主人公が立香になるぞい!!ナンバカ，が主軸になりそうだぞい!!」

立香
「しかも何で私あんなに辱められたんだろ?ねぇ、御免なさいは?」

主人公
「ごめーんチャイ!でねでね?今作ってタカギラスさんの動画から始まったんだけどー……　ま、全然要素無いよねーぇ?だからさ、作品名変えた方が良いよね?そろそろ汚名なんだからぁ。と、言うわけでアンケートを!」

立香
「答える人なんて居ないじゃん。しかもコメントなんてそんなに来てないでしょ?そもそもタイトル変えたらまたタグ祭りの開催じゃん」

主人公

「えー・・・・・・・ なんでそうなるの?!良いじゃん！良いでしょう?・べっつに困る――――
あ、ちょうまち。もしかしてこの小説見てる人って作品名のお陰?・クッウソォォォォオ!!」
立香
「そらそうでしょ?・こんな駄文作品は見る価値が薄すぎるんだよ?・だって約２０００で
これだからさぁ。あ、作業員さんは最後らへんに抱き付かれてたけどあれ何?・ねぇ・・・
ネェ?・」
主人公
「あ?!やめ!!・辞めてよう!!誰も男の喘ぎ声なんて隙じゃないでしょ――――――
立香
「この・・・・ 屑やろう!!!」
主人公
「あぶう?!」

―第二部予告―

――――――誰もが正しいという訳ではない。

「仮面……？」
『我は汝。汝は我』

――――――少女は何処へ行く。

「何故地下牢獄?!」
――――――どこに行くかはわからない。

立香
「で、言い訳は?」
主人公
「だってー…　この小説の予告なんて挟んでも文字が足らなくて飽きられるでしょ?」
立香
「はあ、如何ですか。これが私の世界滅ぼしたんですよ、双六さん」
双六

「え、そこで俺に降る?!あー・・・　ま、頑張れ」
主人公
「ねえ、なんで居るの?もしかして鍵で連れてきた?・・・　ちょっとちょっとー!・男子ー!」
立香
「男子はてめぇだ!!」
主人公
「とんげ?!」
双六
「お、良いところにサッカーボールがぁ!!ほいパス!!」
主人公
「友達はボールってかゲフ?!」
立香
「死ねぇぇぇぇぇ!!」
主人公
「ゲふぅぅぅぅぅう?!・・・・・・　ゴホォ・・・・」
立香

「ランサーが死んだ?!」
双六
「このひとでなし!!」
主人公
「おめーらのせいだぞぉ・・・　カフッ!ゴフゥ!ケブゥ!ガハァ?!」
ジューゴ
「あ、何か踏んだ」
ウノ
「オレも踏んだわ」
ロック
「俺も」
ニコ
「あ、踏んじゃった!」
双六
「テメェラ!!また脱獄したのか?!」
「「「ヤベ!」」」」
立香

「いつも通りだなー」

双六

「待てやコノヤロゥ!!そろそろ大人しくしてろや!」

主人公

「俺は無視ィ?」

第二章　仲間集め

第一話　南波刑務所とペルソナ

　灰となった私は見知らぬ場所に居た。そこは凍えるような絶対零度の山脈地帯。そして下をふと見ると人間の骨が所々出ていた。そこはまるで地獄だった、でも彼の事を考えると不思議と楽になる。

「歩かなきゃ……」

　しばらく歩いていると一人の男が焚き火をしながら座っていた。その姿は何処かの貴族なのだろうかと思うほどの綺麗さで、感覚的には死人に見えてしまう。その男は突然話しかけてきた。

　狩人

「なあ、あんたはまだ死んでない。ここの管理者に会いな、そのまま進め」

「あの……　ここは何処ですか?」

　狩人

「ここは……，慰めの道，と呼ばれる所さ、気を付けな」

「ありがとう御座います」

狩人

「ああそうそう。この宝石は要らないからやるよ。持ってきな嬢ちゃん」

そう狩人が渡したのは白く濁った宝石だった。形は帆に近い。

それを受け取って先に進む。道は埋まっている骨が教えてくれるだろう。猛吹雪の中、爪が剥がれても歩き続けた、すると洞窟を見つけた。そこに入ってみると……。

そこは黄色い世界だった。霧が立ち込み周りがよく見えず、私の本能が警告を出している。何がなんだか解らない、世界が一つになったり。彼が壊れていたり、あの感覚は何だったのだろうか。

静かに周りを見ていると霧の中から丸く口が付いた怪物が襲いかかってきた。だがそれはあまり恐くなく、心の中で、，決意，が感じられた。

『汝、我を欲すか?汝、彼の者を信じて望むか?彼の地にて我望まん』

「望む!!望んでるよ!」

『承知した。汝は我の光。我、汝の盾と剣になろうぞ。呼べ、我が名は――――――ナイアルラトホテップ」

そう言うと何かが現れ、怪物をミンチにしてしまった。
現れた者の姿は触手のような顔にぽっかりと穴が空き、鎧のように神々しく黒い体をしている。腕は存在しているが触手を捻ってできたような手であり、体と同じように黒く、そして爪に当たる部分は赤い。
肩と腹に顔をもした仮面がある。足はスリムで足を触手のように動かしている。むしろ触手だ。その姿を見た私はそれに彼に似た何かを感じた、彼も同じような存在だったのだろうか？
「貴方が……私の…」
『そうだとも。我は汝の可能性。興味が沸いてな、本体のまま来てしまったよ。私の存在は，ペルソナ，と呼ばれているが汝が契約していた者達とは違い、痛みを共通させる。汝は私について知らないだろう、ひとまず汝が掛けている仮面を外したどうだ。もう汝は人間ではない、外せば楽になれるぞ？』
「仮面……？…　人間じゃない？」
困惑しながらも私の顔に手を当てて引っ張ってみる。するとカポッと軽い音と共に外れた。だが私自身の姿が確認できずオロオロとしていると自称私の可能性が手鏡を持ってきてくれた。
そこに居たのは歯車でできた顔の私だった。しかも回りの霧がいつの間にか晴れて

いる。

でもまだ気味が悪いので戻しておく。如何やれば‥‥‥ あ、できた。

『仮面を外すことで汝が見える霧は消えて見えるようになる。そして汝は我の化身であるチクタクマンの性質を持っている、何かあったら剥がせ。取った仮面は意思で付けたりできる。汝の手持ちを圧迫はしない』

そう言うともう一人の私はその後は何も言わず佇んでいた。そろそろしまいたいので，消えて，と念じると硝子のように砕け散りそこから消える。その瞬間、何かに招かれるように眠気が誘った。

「ようこそ、我がベルベットルームへ。おひさしぶりで御座います」

お久し振り？一体どう言うことなのだろうか。しかも此処は何処なのか、一応リムジンみたいだが豪華でクーラー付き、そして飲み物がある。自分の席の右側には，あの時，見かけた‥‥ えーっと‥‥。ああそうそう。たしかマーガレットさんだっけな？でも目の前の人間（？）は知らない。

「ええ。貴方には会っておりません。しかし我が主人が貴方を見ておりました、ですが

貴方は対になる存在である，ニャルラトホテプ，の元であるナイアルラトホテップが貴方の可能性でした。まあ、私に取っては可能性がそうあるだけで関係はないのですがね‥‥。これを渡したいので少々手荒ですがこうやって呼ばさしていただきました」

そう言って出してきたのは魔道書のような分厚い皮でできた本、そして黒い鍵だった。その本を開いてみると色々な者が書かれていて，もう一人の自分，についてや、それが使える素質がある者が居る世界が記されていた。言うなれば大百科事典と言えば良いのだろうが。

ふとパラパラと見ていると気になる世界があった。，ナンバカ，と呼ばれる世界らしい、この世界には一度ぐらい行ってみたい物だ。

次に鍵を取ってみる。するとその鍵はふわふわと浮き上がり体に入ってくる。

「うおっぷ?!」

「あら、この鍵は浮きましたかしたか?イゴール様」

「うーむ、しかしこれをお造りになったのは我が主でもなくあのお方なので。私めは知らないのですがね。まあそれは言うなれば世界を開く鍵です。その鍵はどんな世界でも行き来できるのです、しかし滅んだ世界は行けませんのでご注意を」

「え、何そのチート‥‥。あ、でもこれで行き来できるのはありがたいな」

色々としていると急にまた眠気が襲ってきた。今度は目覚めるようだ。

「お来おつけください、彼は取り憑かれています。取り返したいのなら最大戦力とも呼べる世界、，ナンバカ，と言うところに行きなされ。その変わりに囚人としてそこに行くか侵入しに行くかになりますがそこは考えなさいませ」
「ではご機嫌よう」

目を覚ますと何故か監獄にいた。え、そう言うことなの?!そう言う事なの?!
うーん、取り敢えず本で見てみるか・・・・ フムフム、此処は南波刑務所ねぇ・・・・・。て、此処は地下なのかー。あれ、地下は行くべからずと書かれてんだけど・・・ 殺されるぅ?!
取り敢えず転移魔術を・・・・。あ、漂流という感じにしよう。そうしよう。

―医務室―
「全く。此処は病人を手当てするところで泊める所じゃねぇんだけどな」
ヤベぇ。何とか寝てる感じにしてるけどこの御十義翁さんが恐い。そしてその隣にいる八神さんがなんか見抜いてるッぽいから凄い恐いの!洒落にならないほどのプ

レッシャーが・・・・。
　そ、そろそろ目ぐらい開けとこ
「お？起きたか。おめぇさんは何て言う名だ？俺の名前は知ってるだろうが」
「えっと私は藤丸立香と言って・・・・　いつの間にか此所に居ました」
「ふーん。あとこの本開かないんだが知らないか？中身を見たいんだが」
「あ、それ私じゃないと開かないですよ？はい、これでいいですか？」
「お、すまねぇな。なんじゃこりゃ?!人間の枠を越えたこと書いてやがる?!」
　え、そんなんでしたか？・・・・　あ、一応私そう言うのに仲間入りしてたわ。
　と言うかそんなに驚く？えーっと目的は強い人を勧誘したいんだけなんだけどなぁ。
「あのー、私どうなるんですか？」
「多分・・・　牢屋送りだと思うぞ。無断侵入した者はそう言うことになってるからな、あとそろそろこの本を帰しとくからな、それは他人には見せるなよ。そいつを見た者は常人でも壊れた奴でも驚くからな。さて、後少しだなぁ」
　何か時間を待っているみたいだがどうなるのだろうか・・・・・・　出来れば優しい人が良いかなぁ。英雄王見たいに面倒見が良いツンデレとか良いかも。
　時間を待っていると一人のスキンヘッゲフンゲフン。面構えがいい人が来た。ストレスで禿げたのだろうか？もしそうだとするとこの人、賢王見たいに仕事やってないと

ダメな人か？過労死さんかな？

「なんか馬鹿にされてる気がするんだが？まあ良い、付いてこい」

「頼むぞ双六。それと其奴には手を出すな、返り討ちだぞ？」

「冗談を……」

あ、声も似てる。

双六さんに連れられ着がえさせられ今に至る。今は廊下を歩いている、何か凄ヒビが……。此処はどんな魔境だ？もしかしてインド神話並みの人がわんさか居たりするのだろうか？

「ここが南波刑務所の１３舎１３房だ、呼んだら入れ――――――――よし、入ってこい」

「ハーイ……」

「そうそう。此奴には番号はない、とは言い切れないのでな。一応０番と呼べ」

「え？禿げ番？」

「１５番……　どうやったらそう読める!!ふん!!」

「ガゴォ?!」

今殴られた人は１５番と呼ばれているらしいね。えーっと双六さんが言うには白人でピンクと金色の髪の人は１１番。髪形が少しまともな赤と紫髪の６９番、そして緑髪でほわほわしているのが２５番らしい。

と言うか何回も脱獄してると言ってたけど・・・・それを戻してる双六さんは化物？

「ではな。新人には優しくしろよ。それと脱獄すんじゃねぇぞ！」

そう言って出ていく。良し!!悪口言えるぞ！

でも自己紹介して貰わないと色々と困るんだよなー。まあそこが友達への一方だから。

「ねえ、自己紹介してくれない？私、貴方達のこと知らないからさ」

「あ、そうか。俺はジューゴと呼んでくれ」

「オレの事はウノって呼んでくれ。あ、彼氏居る？」

「俺の事はロックと呼べ！何でも飯でも聞いてくれ！」

「僕はニコ！よろしくね！」

うん、皆良い子だわ。自己紹介がおわると皆が各々別のことをやり始める。ニコは漫画に食いつき、ロックは食べ物系テレビ番組を見ていて、ウノとジューゴはカードゲームなどをやっている。

自分は取り敢えず隅に行ってあの本を取り出して見てない部分を見始める、ここの事

も載ってんだが？フムフム、此所には派閥に分けられててオカマとかは日常茶飯事なのか？

お、このペルソナは，源義経，なのかぁ。格好いいな！こっちも英霊のほうも良い！

本に熱中しているといつの間にか目の前にジューゴが居た。此奴、できる！

「何見てんだ？お、これ偉人の本か？――――すげぇ!!色々載ってる！」

「あ、それには武器とか詳しく書いてあるから。エクスカリバーの誕生とか」

「え、何それ・・・　今、何気に凄いこと言ったな」

え、そうなの？普通じゃないの？あ、自分もしかしてもう毒されてる？

第二話　美少女あらわる。木工製品と核

ああ、暇すぎるぅ……。私は今双六さんに連れられている。と言うかここ凄いね?!色々あるよ!……　あ、でもその色々はセキュリティのこと何ですがね……。

と言うか何で後ろに綺麗な男の娘が居るんですがぁ……。え、弟?・嘘ーん?!双六さんの?!似ても似つかないなぁ。え、戻れって?……　はーい、転移しまーす。

「うお!?なんだそれ!」

「凄い!ヒーローみたい!」

「えー……」

転移した先にロックとニコがすぐ近寄ってきましたで御座るぅ…。

色々と誤魔化しているとジューゴが私の本を取ってあるページを二人に見せる。

そのページは……　あ、そこ魔術師のページだわ。あかん。するとそれを見た二人は

また食いついてくる。ガチで・・・ あぁもう!!どうにでもなーレ!と言うわけで二人に魔術師の事を洗い浚い話す、そうじゃなきゃガチでヤバイ。そして私の本を返せや!

「あ!・・・・ もうちょっと見せろよノーリ!」

因みに今の用に私の事をジューゴ達は0のロシア語でノーリと呼んでくれている。私一応日本人!それを込めて別世界に逃げだそうとするがジューゴに捕まり動けなくなる。しかし掴んだ場所が脇腹だったので猛烈に恥ずかしい・・・・・ と、言うより胸に当たる!当たる!・・・・ あ、これもう英霊で馴れてんだったわ。

「はーなーしーてー!!と言うかどこ触ってんの?!」

「知るか!!と言うか今お前何しようとした?!何か嫌な予感したんだが?!」

「はあ・・・・ まだ脇腹だから良いけどね?ほら、正座」

「え、何で?」

「正座。・・・・・・・・・ 正座!!」

「ハイ!」

正座させて掴むときは腕とか、脇腹はそう無闇に触るなとか色々と言いながら足元にガンドを撃ち続けた。所でこの二人はどうしよう・・・・。あ、取り敢えず教えたから大丈夫だよね!だよね!!

その二人を見て考えている内にジューゴがその隙を突いて脱獄してしまう。

あーあ、私知ーらない、ボコられてもしーらない。
「あ、ねえねえ。ノーリ！このＦａｔｅって作品なんだけどこのキャラクター似てるよね」
「ふーん、どれどれ……　これ何処で？」
「ん？普通につーはんだけど？」
通販はここまで進歩するのか？たしかこれって…　私の世界の。まあ、所々違うから別に気にしないんだけどねぇ？と言うか後ろで練習しているロックが凄い勢いで魔術を習得してるんだが?!
こんなに才能が……。惜しい!!出来れば魔術教会に話したいよ!!そんぐらいだよ！あ、でもこの世界は化物揃いと言うかこの南波刑務所がその巣窟なんですがね……。本当どうなってんの？
そう考えているとジューゴが双六さんに捕まれて戻される。今回速くない？
「くそぉ…。でも良いのが見れたぜ！皆！」
「お、良いのって何だ？ジューゴ」
「ふっふっふ……　それはな……。女だ!!!」
「そ、それは女の子か?!お姉様か?!そそそそれともお、お嬢様かあ?!」
「一応私女なんだけどなぁ……。よし！ここ爆発しよう！」

「まてまてまて待て!!吹っ飛ばすな!だがそれよりも女だ!」
「行こう行こう!!」
「あ、こら!!手を引っ張んないのニコ!」
ニコが手を引っ張って私ごと連れていく。そしてとうとう面会実にきてしまった。
でも多分弟と知ったら驚くんだろうなー、あー。戻りたい!!皆が扉に押しかけたので扉が抜けてしまった。あ、ヤベぇ。後で私が怒られる奴だわ。
顔を青ざめていると弟君が口が開いていた。あ、何だろうか。アストルフォ思いです。
「な?!テメェラ?!」
「上玉じゃないか」
「妹が居るなら言えよ!」
「そうだぞ!おにいたまー!」
「おにいたまー!」
「フッ!滑稽だわ。私のセンサーが反応している」
「そもそもお前には言っただろうが。・・・・・ はぁ、此奴は男だ。女じゃねえぞ」
「お兄ちゃん。その立香ちゃん以外の人達は誰?」
「お兄・・・・・ ちゃん?」

はは！愉悦に浸るとわ正に私の事ぉ!!いやー、皆の顔がいいね。うん、愉悦！
所で何で・・・　あ、ちょっ?!私も?!押し返さないでぇ?!

結局送り帰されますた・・・・・。何でやー。私なんもしとらんやろー・・・　あ、脱獄してるな。そう言えば双六さん明日らへんに所長に挨拶しに行くから付いてこいとか言われたんだよなぁ、待合室で気まずくなんの知ってるくせによぉ！
てかもうジューゴの口が移ったかなぁ・・・、だんだん似てくる。
と、言うわけで夜です。あ、そういや私ここ最近いびきとかのせいで寝れないんだったよ！くそぅ！抱き枕が必要だよぅ！まあ今夜ぐらいジューゴ抱き枕にしとＺｚｚｚｚｚｚｚｚ

あーさがきったー希望ーの！あーさーがー。はい！朝です！ぐっすり寝れたよ！
でもいつの間にか抱き枕が赤面でこっち睨んでるぅ・・・・　私何かやった？
次ニコ抱き枕にしよー・・・・・。と言うわけで手を離す。
「よ、よう・・・・　ノーリ・・・。言い夢見れたか？」
「うん？見れたけど如何したの？」
「・・・・・・・・・　ノーリ、お前は女として恥じらいはないのか？」
あ、そう言う事ね。

今日は仕事の日、木工品を組み立てるらしい。ウノとジューゴはパズルかなんかの話をしている。それを見ている二人は何時もの事のように見ている。
ウノはでかい機械をどこからか取り出してそれをジューゴが解いてしまう。
その機械にはバイオハザードマークが書かれていた、これは多分核だろう。
「・・・・・　?!」
「あ、今一瞬世界終わりかけた？」

「うん。と言うかあれって核じゃあ・・・」
するとその直ぐ後に扉を開けて双六さんが入ってきて並べと連れられる。
木工製品ですね解ります。

「なあ、あいつらって楽じゃないか？削るだけだろ？」
「なぁに言ってやがる。普通は難しいもんなんだよ」
「たしかに彼奴等は手先が器用だからな」
「私って要らない子？」
二人は木を削ってナンバZとバニーガール人形を作り、双六さんに叩かれる。
因みにそれ以外はいたって普通だったので言うことは無い。
「なあ、ここをおすと・・・」
「ぐお?!」
「「あ」」
いや、やっぱりやられた。しかし我ながらこのイスは良いできだな。

そう言えば今日に看守長の所に連れてくとか何とか言ってなかったっけなー。
戻ったら核を処理してリサイクルしないと。あ、双六さんが胃を抑えてる。

エピローグ?　裏の裏、そして裏。

闇が見えた。空が見えた、たしか私は南波刑務所で囚人生活してたはず。でもそれは夢じゃない。でも私はカルデアで生活していた。夢ではない……　あれ?私は何故、二つの記憶を?

――――汝、制約の名の下に我答えん。逆なりし，９，を授けん。

，９?……　何の数字だろうか?たしか誰かが言っていた。それはタロットカードの番号と、誰だかはわからかったが言っていた気がする。これは夢?それとも現実なのだろうか?

――――――起きろ０番!!!」

その声で私は目を覚ました。んだけど何故か荷物のように脇に抱えられ、厳重な扉の前にいた。あの夢の事を思うとこの世界は夢なのか現実かは解らなくなってきた。

あ、これギャグだった！いっけねいっけね。少しシリアス展開にしてしまったぜ。

「――――――――イクラ。よし、もう許可は取っているから入るぞ」

「このままあ?!」

「そらそうだろうが。お前が逃げないようにしてんだよ。解れ」

「あ、ハイ」

このあ後に凄い顔になった双六さんにまた荷物みたいに持ってかれました。

何かもう色んな意味で泣きたいよ。

―夜―

今日は何時もより寝れなく、すぐに起きてしまった。鼾や寝言にはもう馴れたはずだった、しかし今日に限ってすぐに起きてしまったのは，カルデア，の事をまた思い返していたからだ。

彼らを思い出すと戻りたくなってくる、でもそれは良いことなのか？自分にはここを離れたくもない、でも・・・・・・ あぁ・・・ ダメだ。自分は何をすれば良いのかが解らな

い。

そうムシャクシャしていた私は本に手を伸ばして適当に開く。

――――『汝はどうするか、我は汝であり我。汝は迷いを持つがそれは出来事の過程であり本当の迷いはない。汝‥‥‥　お前はめを覚まさなくてはならない、この世界とは繋がりが取れた。次は他の世界へと行くと良いだろう、出来れば，ペルソナ，の世界へと渡り。蝶の配下の元で戻るための力を与えられよ』

私である私はそう助言してくれる。そうすることが私も安心するだろう。

すると眠気が急激に誘い、眠ってしまう。

「ようこそ、我がベルベットルームへ、また来られましたな」

「‥‥　ええ、そろそろ元の世界にと」

「さよう御座いますか。でしたらめを閉じて下され、さすれば覚めるでしょう」

「有難う御座います」

「では、ご機嫌よう」

私は目を開けた、するとそこは真っ白い部屋で隣でＤｒ．ロマニが座っていた。
その横に目をやるとそこには，彼，が居て、此方を見ていた、戻ってきたと実感する。
「お、起きた!!高木君、僕は皆に知らせてくるよ！」
「ええ、ロマニ。・・・・ それと立香ちゃん。お帰りなさい」
高木さん・・・・・・ ？彼の名前なのだろうか？でも、知れてスッキリした。
彼の手を取って私は弱々しくなった口を開く。
「ただいま、高木さん」
「おう。皆まってるぞ」

――――おや、君達はここまで来たのかい?いやぁ僕にはただの課程にしか見えないよ。でも君達は如何だったかな?ああ、なるほどね?でもまだまだこの物語は続いて行くはずさ。

――――そうだな、我が見ている限りこの物語は続くだろう。だが忘れるな、この物語は色々な世界で出来ていた、だからこそだろう。この物語は色々な可能性を持っている。君達が書いてみるのも良いだろう。

――――あ、もう来たのかいハデス?そうそう。この物語は続いているがここでおしまいかもね?この物語は気紛れ何だよ、もしかしたら君達が望んだ未来が来るだろう。

――――花の魔術師、それは如何かな?……　と、今までなら言っていたが今は違うからな。物語は終わらないんだ、無論この物語はずっと続いて行くと。我々が決めたんだ。

――――そうだね。では、良い物語旅行を。観覧者!さあ、王の物語を続けよう!